

東海大学文明研究所蔵

古代エジプトと アンデスの色彩

Colors of Ancient Egypt and Andes

2019年3月11日～7月31日 東海大学湘南校舎11号館附属図書館展示室特別企画展

編集・執筆：大平秀一・吉田晃章・山花京子

主催：東海大学文明研究所・附属図書館

後援：文学部

巻頭言

文明研究所では、「アンデス先史文明に関する遺物」（アンデス・コレクションと通称）と「古代エジプト及び中近東コレクション」（AENET と略称）を保管しています。前者は、紀元前 1000 年ごろのアンデスの文明確立期から 16 世紀植民地時代初期までのほとんどの時代と地域を網羅するもので、国内最大級のアンデス先史文明コレクションといえます。後者は、古代エジプト研究の第一人者であった故鈴木八司名誉教授のご遺族より寄贈を受けたもので、そのパピルス文書は、古代エジプト社会を知る上で非常に重要な資料です。ともに人類にとっての貴重な遺産であり、本研究所では、2017 年度から「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」の研究プロジェクトを開始し、コレクションの保管・整理、研究、活用を推進しているところです。その活用のための活動の一環として、両コレクションについての特別展示会「古代エジプトとアンデスの色彩」を、東海大学湘南校舎 11 号館図書館で開催することになりました。展示品はコレクションのごくごく一部ではありますが、「色彩」という側面からの本展示により、本学が所蔵する文化財の魅力を、ご感得いただければ幸いです。末尾ながら、共催いただいた付属図書館並びにご後援いただいた東海大学文学部の関係各位、そして展示の準備にご協力いただいた学生諸君に、厚く感謝申し上げます。

東海大学文明研究
所長 山本和重

巻頭言

2019 年 3 月 11 日より 2019 年 7 月 31 日まで、東海大学付属 11 号館図書館展示室にて、文明研究所との共催で「古代エジプトとアンデスの色彩」展を開催します。この展示会は、2017 年度より発足した文明研究所の「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」プロジェクトの一環として、同研究所が所管する「アンデス先史文明に関する遺物」（通称アンデス・コレクション）と「古代エジプト及び中近東コレクション」（略称 AENET）の遺物を「色彩」という共通テーマでまとめています。時代も地域も異なるそれぞれの文明において、どのような色彩が使われ、人々は色彩にどのような意味を付与したのか。この展示では、文明と色彩との相関を理解するために少量ではありますが、選りすぐりの展示品を出陳しています。

古代エジプトの展示セクションでは、古代エジプトの 5 原色とされた赤・黒・白・青（緑）・黄を取り上げ、それぞれの色に込められた意味と役割を俯瞰します。アンデスの展示セクションでは、多彩色の遺物を用いながら、山の神と人々とのかわり合いを解説します。

本展示が様々な興味を持つ皆さんの目に留まり、身の回りにあふれる色彩が、果たしてどのような影響を及ぼしているのかを考えるきっかけとなれば幸いです。

最後に、本展示にご尽力をいただいた文明研究所、文学部の関係者各位に心よりお礼を申し上げます。さらに、展示パネルの作成などを手伝ってくれたチャレンジセンターユニークプロジェクト、アーカイブ・レリック（略称 AR）の有志の学生さんたちにも感謝の意を表します。

東海大学付属中央図書館
館長 中嶋卓雄

展示会開催趣旨

東海大学文明研究所では、2017 年度より古代エジプト及び中近東コレクション（略称 AENET コレクション：以下略称で記す）とアンデス先史文明に関する文化財（通称アンデス・コレクション：以下アンデス・コレクションと記す）の管理保全及び活用を行っています。

AENET コレクションは 2010 年に逝去された東海大学名誉教授鈴木八司先生のご遺族より 2011 年に寄贈を受けました。寄贈は鈴木先生のご自宅の書斎にあった書籍約 6000 冊、研究室に遺されていた紙焼きの写真やネガ、ポジ類が約 1 万 5 千点と考古遺物が 5667 点^{※1}で構成されています。一方、旧出光美術館及び出光興産所蔵のアンデス・コレクションは、2003 年と 2004 年に本学に収蔵され、その目録総点数は 1692 点^{※2}、特に織物と土器がコレクションの主体となっています。

いずれのコレクションも大学施設が所蔵する文化財総数としては、本邦において屈指であり、特にアンデス・コレクションについては美術的価値が非常に高いものです。

文明研究所では、2017 年度よりアンデス・コレクションと AENET コレクションという学内の 2 大コレクションの包括的な管理を行うことになりました。これに伴い「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」コア・プロジェクト 3（2017～2019 年度：代表者 山花京子）を発足させ、大学からの支援と協力を得ながら、学内文化財を包括的に修復保存し、活用する活動を継続しています。

本展示会は、文明研究所、付属図書館、そして文学部の主催及び後援により、普段は陳列展示することができない貴重な学内文化財を披露することで、本学が誇る貴重な人類の文化遺産を見知っていただき、また、本学における文化財保護修復保全活動の一端をご理解願うために企画された特別展示会です。本展示会が今後の大学コレクションの維持保全活動や展示活動、そして学内コレクションを軸とした研究が広がることを祈念して止みません。

文明研究所 「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」コア・プロジェクト 3
プロジェクトリーダー 山花京子

※ 1 AENET コレクションの現時点での台帳登録数内訳は、土器・陶器 1972 点、金属 59 点、有機物（木製品・繊維製品など）138 点、石器 2574 点、ガラス・ファイアンス 698 点、パピルス 137 点、その他 89 点である（2019 年 1 月 20 日現在）。

※ 2 アンデス・コレクションの台帳登録総数の内訳は織物 411 点、土器等 1063 点、金属器 39 点、石器 12 点、木製品・貝製装身具等 166 点である。現時点では、新たに登録されたものを含めて約 2000 点である。

目次

巻頭言

(文明研究所所長 山本和重)・・・・・・・・・・・・・・・・	ii
(付属図書館館長 中嶋卓雄)・・・・・・・・・・・・・・・・	iii

展示会開催趣旨（山花京子）・・・・・・・・・・・・・・・・	iv
-------------------------------	----

地図・年表

古代エジプト地図（山花京子）・・・・・・・・・・・・・・・・	vii
古代エジプト年表（山花京子）・・・・・・・・・・・・・・・・	viii
エジプト時代区分と表記について・・・・・・・・・・・・・・・・	ix
アンデス地図（吉田晃章）・・・・・・・・・・・・・・・・	x
アンデス年表（吉田晃章）・・・・・・・・・・・・・・・・	xi

資料解説編

古代エジプト	
古代エジプトの赤・黒・白・青（緑）・黄・・・・・・・・	2

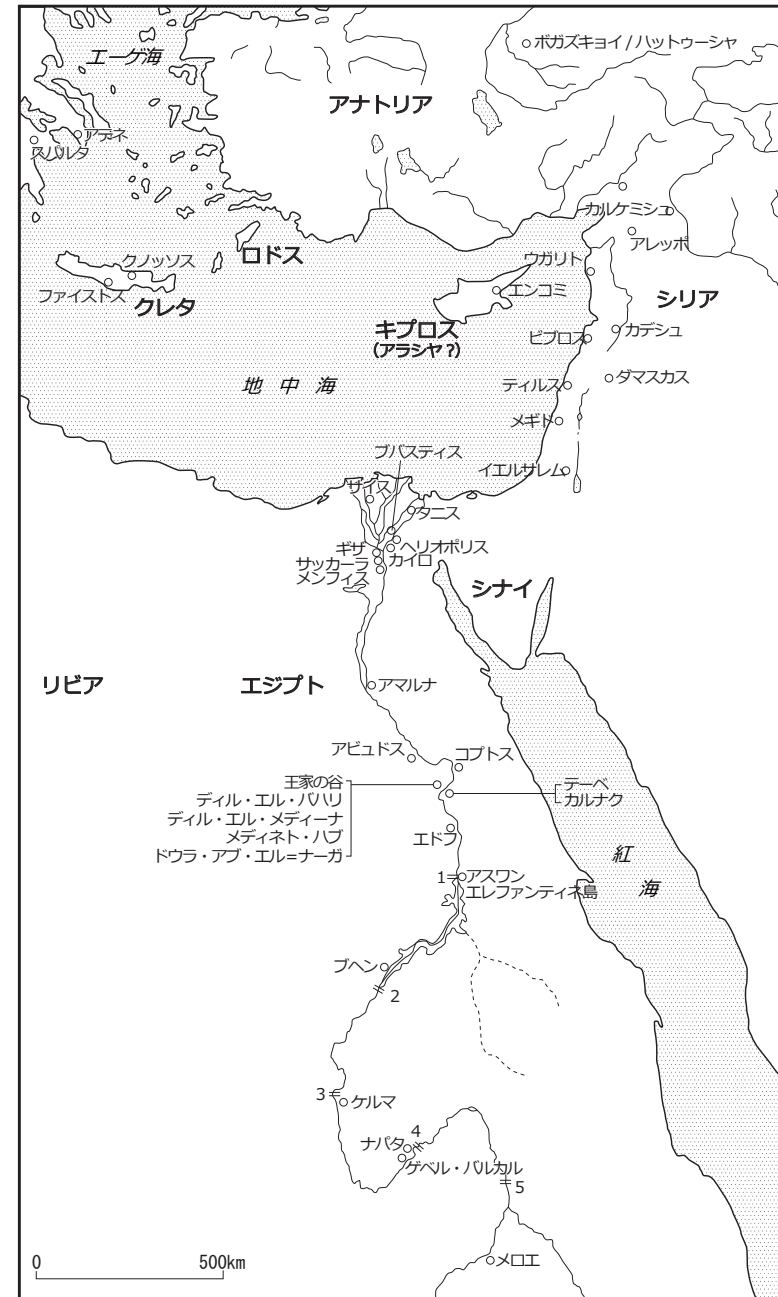
アンデス	
アンデス文明概説（吉田晃章）・・・・・・・・・・・・・・・・	12
アンデス・山の神々の多彩性： 「ワロチリ文書」から読みとる先住民の感性・感覚（大平秀一）・・・	19
アンデスの土器を科学する（山花京子）・・・・・・・・	32

図録編

古代エジプト	
コプトの織物（山花京子）・・・・・・・・・・・・・・・・	38
アンデス（大平秀一）・・・・・・・・・・・・・・・・	54

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・	62
協力者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・	62
執筆者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・	63

古代エジプト地図



凡例

1. 本書『古代エジプトとアンデスの色彩 Colors of Ancient Egypt and Andes』は、展示会『古代エジプトとアンデスの色彩 Colors of Ancient Egypt and Andes』の展示解説図録に資料編を加えた書籍である。本書の刊行に当たっては文明研究所と文学部学部等研究教育補助金より助成を受けた。
2. 展示会は東海大学湘南校舎 11 号館図書館展示室にて行った。会期は 2019 年 3 月 11 日～7 月 31 日である。
3. 展示会の企画・構成・設営は文明研究所コア・プロジェクト 3「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」のメンバーである吉田晃章（研究員）大平秀一（アドバイザー）、そして山花京子（文明研究所所員）が担当した。
4. 本書の執筆にあたっては、目次に執筆担当者を明記している。5. 展示各資料には、資料名、時代（文化期）、推定年代、材質、法量を記した。法量はcm表記で、H：最大高、W：最大横幅、T：最大奥行き、D：最大直径を示す。
6. 展示会時の遺物名称及び本書の遺物名称については、基本的には登録された正式名称を使用した。展示の趣旨に合わせるため、一部変更しているものもある。問合せの際には、登録番号を参照されたい。
7. 本書に掲載した資料写真の著作権は東海大学文明研究所が有する。また、解説内に掲載した写真はそれぞれの著者が著作権を有する。無断転載を禁ずる。
8. 展示会の準備および展示解説員として多くの学生が参加した。協力者氏名は巻末に別途明記した。

古代エジプト年表

紀元前 5500年	先王朝時代	前5500年頃 前4000年頃 前3500年頃	バダリ期 ナカダⅠ期 ナカダⅡ期 ナカダⅢ期		赤色研磨黒頂土器
3000年	初期王朝時代	【第1王朝】	ナルメル王 上下エジプトを統一 首都をメンフィスに置く		銀神頭
		【第2王朝】			
2500年	古王国時代	【第3王朝】 【第4王朝】 【第5王朝】 【第6王朝】	ジョセル王の宰相イムホテプ 階段ピラミッド建設 クフ王、カフラー王、メンカウラー王 ギザに大ピラミッド建設 ウセルカフ王第5王朝樹立 太陽神ラーが最高神となる ヌビア遠征により交易が盛んに行われる		
2000年	第一中間期 中王国時代	【第7-11王朝】 【第11王朝】 【第12王朝】	王権が弱体化し、内戦が起こる メンチュヘテフ2世によるエジプトの再統一 首都をテーベに置く		ハ工型護符
1500年	第二中間期 新王国時代	【第13-17王朝】 【第18王朝】	ヒクソスが下エジプト占拠 異民族国家が樹立さ イアフメス(在位前1550-1525年頃) ヒクソスを再統一 首都をテーベに置く トメス1世(在位前1504-1492年頃) 西アジアやヌビアへの軍事遠征 王家の谷に岩窟墳墓の造営始まる トメス3世(在位前1479-1425年頃) エジプトの領土最大に アメンヘテプ3世(在位前1388-1351/50年頃) 新王国時代の最盛期 アクエンアテン(アメンヘテプ4世・在位前1351-1334年頃) 宗教改革行方 アテン神を唯一神に トウトアंकアメン(ツタンカーメン・在位前1333-1323年頃) アメン信仰を復活させる		
		【第19王朝】 【第20王朝】	ラメセス2世(在位前1279-1213年頃) アブ・シンベル神殿などの大型建築を進める ラメセス3世(在位前1183/82-1152/51年頃) デルタ地帯に侵入した「海の民」を撃退		ファイアンス製指輪
1000年	第三中間期	【第21王朝】 【第22王朝】 【第23王朝】 【第24王朝】 【第25王朝】	テーベでの王権の弱体化 上エジプトをアメン神官団が支配する シェションク1世が王として即位(前946/45年) パレスティナへ軍事遠征 エルサレム略奪 東地中海世界の影響 新アッシリアによる侵攻、エジプトがアッシリア属国となる		スカラベ
500年	末期王朝時代 プロトマイオス朝	【第26王朝】 【第27王朝】 【第28王朝】 【第29王朝】 【第30王朝】 【第31王朝】	古典文化の復興 アクメネス朝ペルシアの支配下となる ペルシアを撃退し第28王朝樹立 ペルシアによる再度の支配 アレクサンドロス大王がエジプトへ支配し即位(前332年) エジプトの王朝時代終焉		果実文裂
西暦紀元	ローマ属領時代	1世紀頃	クレオパトラ7世の支配によりエジプトはローマの属州となる(前30年) 聖マルコがアレクサンドリアにてキリスト教教義を伝える ローマ帝国が東西に分裂(395年)		
500年	ビザンティン帝国		コプト文化		

エジプト 時代区分と表記について

古代エジプト史では、特定の時代を表現する際に○○王国時代、第△△王朝
そして、該当する絶対年代を併記することが通例である。さらに、上記の表記
法に加えて、□□王治世と特定することでより狭い時代範囲を示すことがある。

一方、ローマ属領時代以降、イスラーム時代の到来までのエジプトの時代・
年代表記は曖昧且つ混乱の様相を呈する。王朝時代終焉後のエジプトは、一般
的に「コプト時代」と称することが多いが、これは政治的な時代区分ではなく、
文化的時代区分である。

エジプト王朝が終焉後、エジプトはローマ属領となり、そこではキリスト教
が浸透し始めた。392年にテオドシウス帝がローマ帝国の国教をアレクサンド
リアに拠点を置くアタナシウス派のキリスト教と定めた後、エジプトにおける
キリスト教はさらに興隆した。このテオドシウス帝の死後、世界史の時代区分
では、ローマ帝国は西と東に分裂し、東はビザンツ帝国と呼ばれるようになり、
エジプトもビザンツ時代に入る。しかし、ローマ属領時代初期より連綿と続い
てきた土着のキリスト教文化（美術様式や建築様式など）はあまり変化するこ
となく受け継がれる。つまり、エジプトにて広がりを見せたキリスト教（コプ
ト教）文化は、政治的な枠組みが変化しても存続し続けた。したがって、エジ
プトにおけるコプト文化の時代とビザンツ時代はオーバーラップする形とな
る。

その後、646年にエジプトはイスラーム軍に征服され、以来、イスラーム教
国家となり、政治・宗教的には大きな転換がもたらされるが、文化的にはそれ
まであった土着の文化の上に新たなイスラームの文化が重ねられる形となっ
たため、従来のコプト文化と後続のイスラーム文化への変容は非常に緩やかなも
のだった。コプト文化からイスラーム文化への移行には大きな断絶はなく、エ
ジプト独自の文様や装飾がコプト文化とイスラーム文化の融合の中で生み出さ
れた。


このような経緯があるため、本展示会の中での時代表記は、ビザンツやイス
ラームなどの大きな政治的区分を利用したが、すべて文化的には一つの大きな
根源を共有するという意味合いから、（コプト文化期）という表記を付与した。

アンデス地図



アンデス文明史年表

		北海岸	中央海岸	南海岸	北高地	中央高地	南高地
9000 5000 3000	先土器時代 (栽培・飼育) (神殿建設)	バイハン	カラル		ギタレロ	コトシュ	アヤクチヨ トクバラ
1800 800	形成期 (土器制作) 冶金技術発達	(クビズニク) チャビン					チリバ
紀元 元年	地方発展期 (灌漑農耕)	モチエ	リマ	ナスカ	ハラカス カハマルカ	レフワイ ワルバ	プカラ ティウナク ルバカ
700	ワリ期 (都市国家)	ワリ					
1000	地方王国期	チム	チャンカイ	イカ・テン チャ			
1500	インカ帝国期 (全アンデスの 政治的統一)	インカ					
1532 1821	植民地時代						



資料解説編

古代エジプトの赤・黒・白・青（緑）・黄

山花 京子

古代エジプトの赤

古代エジプトの基本色は5原色と言われ、それは赤・黒・白・青（緑）・黄である。これらの色のうち、古代エジプト王朝が成立するより以前から多用されていたのは赤・黒・白である。例えば、赤色研磨黒頂土器（通称ブラック・トップ）と呼ばれる先王朝時代の土器（図録参照）は、その胴部が赤褐色であるのに対し、口縁部は光沢を持った黒で着色されており、強いコントラストの色彩を放っている。赤色研磨黒頂土器はその材料となる粘土に多くの鉄分を含み、比較的低下度で焼成するため、器面の色が赤褐色（以降、簡略化して赤と記す）となる。焼成後まだ熱いうちに、口縁部をまだくすぶっている炭の中に入れると、器から酸素を奪い還元状態となるため、黒色に発色するのである。赤と黒という強い色合いは、焼成のプロセスの中で自然に生み出されたもので、人工的に釉薬を掛けて作ったものではない。

このように、同じ材料の粘土から赤と黒、というまったく違う色が発色するという現象、つまり、一つのものから2つの見た目の違うものが生み出される、という不思議な現象を知り、古代エジプト人は何を感じただろうか。実際、赤色研磨黒頂土器は主に墓の副葬品として使用された。墓に副葬する特別な土器として、何かをシンボライズしていたようにも思える。



写真1 白色交線文土器 メトロポリタン美術館所蔵（撮影 山花）

赤と黒の対比が美しい赤色研磨黒頂土器とほぼ同時代には、赤と白の顔料で色付けをした白色交線文土器（写真1）もある。こちらは、器面に赤みの強い化粧土を塗布し、器面に白色で幾何学的な交線文やカバなどの動物、サソリなどの昆虫を描いていた。こちらも墓の副葬品として使用されていることが多く、描かれたモチーフには、やはり何らかの意味が込められていたと考えられる。

王朝時代になると、このような色の対比は土器だけではなく、王のレガリア（象徴物）としても表現されるようになる。例えば、王朝統一後の王（ファラオ）は、上エジプトと下エジプトの両方を統治するシンボルとして、上エジプトの象徴である白冠と、下エジプトの象徴である赤冠を合わせた二重冠を被った。石灰岩台地が主体の上エジプトと、ナイル川の堆積土を象徴する赤褐色をした下エジプトの色を冠の色として、2つの異なる土地の支配者として赤白の冠を被ったのである。そして二国の王は、活力のみなざる姿として、常に赤褐色の肌で表現された（写真2）。

赤は古代エジプト語ではデシェル *dšr* で、英語の砂漠（desert）の語源ともなった単語である。赤は印象の強い色だけに、様々な意味をもつ。古代エジプトにおいても同様で、赤が血の色（特に女性）と結び付くことから、身に着ける者をすべての厄災や悪意から守る「イシスの結び目」護符として、イシスの血の力によって守護を願う祈願文が死者の書第156章に記されている（Faulkner, 1994: pl. 32）。また、第18王朝時代に記されたベルリン・パピルスには、母と子供を守護するために青藍色のラピスラズリ、赤メノウ、青緑色のトルコ石で作られた護符に呪文を唱える、と記されている（Erman, 1901: 8-9）。

つまり、赤は健康や子宝を司る女神の色であり、女神の神聖な血の力で守護を願う色である一方、他方では「死」、「悪」や「無秩序」とも結びつく。古代エジプト語で「赤くなる」という表現は、「死ぬ」という意味であり、「赤い心臓の行い」とは、「怒りをあらわにする」という意味でもあった。このようなネガティブな意味を表現するとき、赤はセト神と同一視された。セト神は嵐や暴風、雷鳴の神であり、無秩序の神でもある。「ホルスとセト物語」神話においては、兄であるオシリス神を殺し、自らが玉座に就こうとオシリス神の子であるホルス神と争った神である。

赤色はまた「破壊」とも結びつき、太陽神ラーとも関連づけられる。砂漠気候で雨の乏しい国においては、太陽光は時としてエジプトに日照りの害を与え、人々を苦しめる。太陽神ラーは人々が抗えないほど威圧的で厳しい側面を持っているのである。赤色の蛇の形をした護符は、人間が制御できないほどの力を持つ太陽を象徴する。この形状の護符を身に着けることによって、人間は太陽神に守護してもらえ考えた。

破壊をもたらす太陽の側面は、セクメトという雌ライオンの神によっても表現される。「人類破滅の物語」の中では、セクメトが人間に疫病を流行らせ、次々と人々を死に追いやる。この神話の中で、セクメトは太陽神ラーの娘として登場するが、太陽神ラーの厳しい側面を、通常赤色の身体で表現されるセクメト女神が表わしているのである。

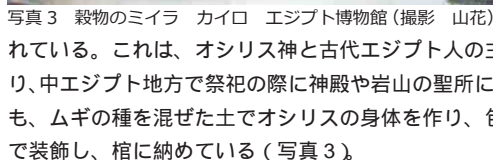
このように古代エジプトにおいて、赤色は強い力を持つイシス、セト、ラーやセクメトなどの神々と結びつき、「生」と「死」という人間には不可避の両側面を司る色となった。

黒

古代エジプトにおいては、「黒き者」と表現されることのあるオシリス神は、セト神の陰謀によって殺害され、イシスの助力によって復活を遂げた後、冥界へ下り、冥界を統べる王となった。オシ



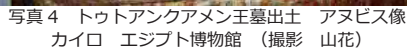
写真2 セティ1世王墓壁面浮彫部分 ベルリン新博物館（撮影 山花）



したがって、再生復活や豊饒（豊穰）に関連する神や呪物は、植物の芽吹きを表わす青緑色（後述参照）だけではなく、黒色とも関連付けられる。例えば、大地の神ゲブは、黒あるいは緑色の肌で表現され、墓場とミイラづくりの神でもあるアヌビス神は、山犬の本来の体毛が褐色であるにも関わらず、古代エジプトの図像においては黒色で表現されている（写真4）。

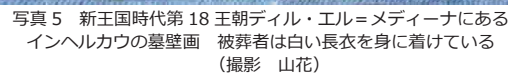
また、人間が横たわる際に地面から頭を持ち上げる役割を果たす枕の小型護符も黒色である。古代エジプトの枕は高枕の形状をしており、被葬者の頭の下に置くことによって被葬者の頭が今にも起き上がろうとしているように見える。東の地平線から昇る朝日を受けて再生復活を果たす死者を表現していると考えられている。「死者の書」の第 55 章には頭を起こして新鮮な空気を呼吸するための呪文、そして第 166 章には頭を切り取られないようにするための呪文が枕との関連で記されている。

古代エジプト語ではヘジュ (*ḥd*) と表記し、「白い」色とともに、光の存在も意味する。前述の二重冠では、白は石灰岩台地に象徴される上エジプトを象徴し、初めての統一王朝の首都は、「白い壁」（歴史時代のメンフィス）と呼ばれた。




リスが黒色で表わされるのは、黒が死と闇のイメージ色であると同時に、豊穡をもたらす土壌の色でもあり、そこから生命の再生復活が行われるからである。黒は古代エジプト語ではケムと表記され、古代エジプト人は自国のことをケメト(*kmt* X 黒い土地)と呼んだ。

オシリスに関する呪物の中で、コムギの種をナイル河畔の土とともに捏ね、発芽させた「オシリスの苗床（オシリス・ベッド）」はトゥトアンクアメン王の墓からも発見された。食であったコムギとの密接な関連を示唆してお奉納された「穀物のミイラ（コーン・マミー）」帯でオシリスの「遺体」を巻き、様々な呪物

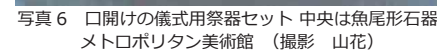


は、「白いサンダルを履く人」は神官であることを意味する (Lichtheim, 1973: 102)。³ 中王国時代以降、約 1400 年後にヘロドトスによって記された『歴史 (イストリアイ)』にも、「神官は亜麻布の長衣とパピルス製のサンダルのみを着用し、他の種類の衣服を入手することは許されなかった (Herodotus, II: 37.3⁴ (訳出 山花))」とある。亜麻布は染料に染まり難く、洗濯をこまめに行う (ibid., II: 37.2) ことで常に白い状態を保つことができた。「人々は亜麻布製で裾にフリンジの付いた衣服を纏い、羊毛製の上掛けを使うが、神域に入る時や葬式では、宗教的な理由から羊毛製の衣服は着用しない (ibid., II: 81) (訳出 山花))」このような記述は、神聖な事象は白と密接に結びついていたことを示唆している。



白はまた、秩序がある状態も表わす。『イブエルの訓戒』は、社会が荒廃した状態を描いた文学作品だが、「見よ。いたるところに泥だらけだ。今の時代、白い長衣を纏う人はいない（Lichtheim, 1973: 151）（訳出 山花）」と悲観し、秩序のある理想の世界に生きる人を「白い長衣を纏う人」と表現している。

一方、白い色の護符は、新王国時代第 18 王朝の花弁文ビーズや花文ビーズに使用された他は、僅かにブトレマイオス朝時代の白ガラスフリット製護符が知られているのみである。エジプトは国土の大半が石灰岩台地であるから、白い石材の入手は可能であったし、ファイアンスも着色剤を添加



せずに焼成すれば白になる。材料の入手の容易さに関らず、白色の護符は殆ど作られなかった。神殿の儀式で使われる祭器には白いアラバスタ製のものが多用されているところから、白は世俗の人間が身に着けるものと考えられていなかった可能性もある。

黄色が黄金の代用色であったように（後述参照）、白は銀色の代用色ともみなされた。白い色を指す古代エジプト語のヘジュの象形文字は棍棒であり、同時に「銀」の意味を持つ。エジプトでは純粋な銀の産出は稀で、むしろ銀の含有量が多い金 - エレクトラム（琥珀金） - を産出する。エレクトラムは純金より硬く、工芸に適しているが、産出量は金より少なく、希少であった。銀は月光と似た色をしているため、同じく月とつながりのあるトト神（トキヤヒヒ姿の知恵の神）やコンス神の像は銀製のものが知られている。特にコンス神は、カルナクのアメン大神殿に祀られたアメン（アメン・ラー）と配偶神ムートの子として月と癒しなどを司る。

死者を墓に納める前に行う「口開けの儀式」は、一旦ミイラとなり動けなくなった死者の身体的機能を回復させてあの世に送りだすための重要な儀式であるが、この儀式では白と黒の器が使われていた。出土例はピラミッド時代（古王国時代）に多く、口開けのベシェス・ケフ（魚尾形石器）とともに窪みのついた盆に置かれている（写真2）。この儀式は、古王国時代だけではなく、王朝時代を通じて行われていたが、この儀式で唱えられる呪文が記された「死者の書」第21~23章には器の色についての言及はなく、白と黒の対比が何を表わしているのかは定かではない。しかし、白と黒で一對の器は、後の時代にも祭器として受け継がれているため、再生を願う儀式において日中と夜間、光と闇、この世とあの世といった二極を象徴的に表わす色であった可能性は高い。

古代エジプトの青（緑）

現代の私たちが古代エジプト人について知っている知識は、ほとんどすべて古代エジプト人の墓の副葬品を研究することから得られている。例えばトウトアンクアメン王の墓より発見された絢爛豪華な調度品は黄金と青（緑）色を基調にしたものが多い。それはなぜだろうか。

古代エジプト人が生活していた自然環境においては、石灰岩台地の白、砂漠の黄色、ナイル川の堆積土の茶～黒褐色、植物の緑、花の赤、炭の黒などの色は存在するが、青色は彼らの身の回りでは空とナイル川の水しかなく、空や水の色は手に入れ自らの傍らに置いておくことはできない。彼らにとって、遠方からの交易によってもたらされる青藍色の石ラピスラズリや、シナイ半島で銅の採掘持に入手できる空色のトルコ石やクジャク石などの炭酸銅鉱石は非常に珍しいものであり、貴重視され、青色を所有するものは裕福な者と見做され、権力者と同義に扱われたとしても不思議ではない。

中王国時代に編纂されたとされる古代エジプトの文学作品『難破した水夫の物語』には、難破した水夫が打ち上げられた島に住んでいたのは大蛇の形をした神で、その神の肌は黄金、そして眉



写真7 トウトアンクアメン王
黄金のマスク
カイロ エジプト博物館
（撮影 山花）

毛は青藍色のラピスラズリで出来ていた、と記されている（Lichtheim, 1983: 212）。⁵さらに、古代エジプト歴代の王墓のうち、唯一盗掘を受けずに発見されたトウトアンクアメンの墓からは、王の棺の中から黄金のマスクが発見されており、そのマスクの頭部のネメス頭巾も濃青のガラスと金で装飾されていた（写真7）。つまり、古代エジプト人は、青色は神とも関連する色であると認識していたことがわかる。



写真8 「死者の書」に描かれたオシリス神と被葬者
カイロ エジプト博物館（撮影 山花）

げのための呪文が約160篇あったが、識字率のきわめて低い古代エジプトにおいて、古代エジプト語の読み書きができない施主に対しても「死者の書」の内容が理解できるように多くの挿絵が使われた。その挿絵では、冥界の神オシリスの皮膚の色は黒や緑で表現されることが多い（写真8）。オシリスの色の起源は古王国時代に編纂されたピラミッド・テキストまで遡ることができ、その中ではウアジュ・ウル（偉大なる青）と呼ばれている。

青（緑）はオシリス神、ホルス神、そしてハトホル女神（写真9）と関連づけられることが多い。植物の芽吹きや繁茂は、再生を司る神オシリスの業であるとされた。オシリスの住む祝福された死者の国は青緑色の「トルコ石の野」とも表現された。そして、その息子であるホルス神は「青（緑）石の主」とされ、その眼（ウジャト）は青（緑）色である。ウジャト眼護符は完全無欠を表わし、ミイラづくりの際には内臓を取りだすために切開した脇腹の傷跡にウジャト眼護符を置き、傷の治癒を象徴的に表現した。

ハトホル女神と青（緑）色は、トルコ石によって関連づけられている。シナイ半島にある古代エジプト王朝時代の銅鉱山セラピト・エル＝カーディムにある神殿には、「ト

古代エジプトでは、「青」と「緑」は明確には区別されておらず、ウアジュ（*W3d*）と表記される。このウアジュには、「新鮮」、「瑞々しい」という意味も含まれており、下エジプトの守護神でコブラの形をした女神ウアジェト「緑（青）なる者」も、ウアジュから派生している。

新王国時代より葬祭文書として記された「死者の書」には、死者がああ世で復活を遂

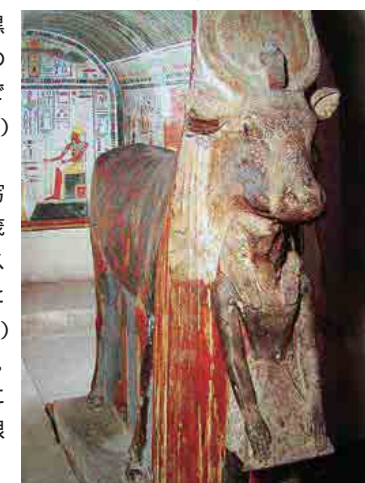


写真9 ハトホル女神とトトメス3世 側面
にはハトホルの乳を飲む幼少のトトメス3世が浮彫されている
カイロ エジプト博物館
（撮影 山花）

ルコ石の女主」の修辞句を持つハトホル女神が祀られていた。同神殿より出土した儀式用青色ファイアンス碗には授乳する羚羊が描かれており、豊饒（豊穡）を司る女神としての性格が強く表れている。牝牛として顕現するハトホル神は、王（国）を養う者として、国母的な役割を果たすが、セラピト・エル＝カーディムでは、トルコ石の青（緑）と豊饒（豊穡）そしてハトホルが結びついていることがわかる。

このように、青（緑）色は、古代エジプトの主要な国家神たちと密接な関連を持つため、家内安全祈願のようなドメスティックな場面よりは、公的な色合いの強い場面で多用される。例えば、王家の墓あるいは裕福な私人の墓からは、青（緑）色の副葬品が数多く発見されている。ウシャブティ（召使の人形と言われている）や、葬送儀礼用の容器などは、殆どが青（緑）色である。これは、副葬品には再生と豊饒の祈願が込められているからである、というのが一般的な説明だが、むしろ「葬祭用品とは青（緑）色をしているものだ。」とした社会的な規定が働いた結果だと考える。同様の現象は現代日本にも見られ、例えば仏壇の仏具セットや装飾は、日常生活で使うものとは形状も用途も異なり、色も規定されている。つまり、「仏壇とは、こういうものだ」という認識が社会全体で共有されているのである。古代エジプト社会においても同様に、「墓とはこういうものだ。」あるいは「墓に副葬するものは青（緑）で作るものだ。」といった認識が共有されているのである。したがって、墓は一見プライベートな空間のように見えるが、実は古代エジプト社会において公的な性格の強い場所と考えることができるだろう。

上記をまとめると、古代エジプトにおいて、青（緑）色は神や権力と密接に結び付いた色であったことがわかる。特に冥界の神オシリスとのつながりの中で、再生や豊饒（豊穡）そして葬送儀礼に使用される色になり、青（緑）と豊饒（豊穡）の関連の中で、ハトホル女神の色としても認識されるようになった。ラピスラズリやトルコ石などの青（緑）色の石が貴重視され、ミイラマスクの装飾にそれらの石が使われたのも、石の希少さと葬送の色としての青（緑）が重なった結果であろう。

黄色（金色）

古代エジプト新王国時代第18王朝のトゥトアメン王の棺より発見された黄金のマスクを知らない人はいないだろう。わずか19歳という年齢で世を去った王の面持ちを映したマスクは無垢の黄金で鍛造され、そのネメス頭巾やウセク広襟飾りはラピスラズリやガラス、紅玉髄などで象嵌されており、背面とマスク内側には隙間を埋めるように『死者の書』の呪文が彫り込まれている（写真10）。王が黄金のマスクを被って埋葬される例はトゥトアメン王の他は第21王朝時代のプセンネス王の2例しか知られておらず、他の主要な王たちの墓が悉く盗掘被害に遭っていることを考えると、例えばアメンヘテプ3世やラメセス2世などの古代エジプト史上でも権勢を誇った王たちも黄金のマスクとともに埋葬された可能性は高い。つまり、黄金のマスクは死して神となった王を表わすための重要な祭祀具であった。

古代エジプトの文献史料の中には、神の姿を色で描写しているものが多い。例えば、中王国時代に編纂されたと言われる『難破した水夫の物語』では、水夫が打ち上げられた島に住んでいた

のは大蛇の形をした神で、その神の肌は黄金、そして眉は青藍色のラピスラズリであった（Lichtheim, 1983: 212）。⁹ また、前述のトゥトアメン王以降、第19王朝時代のセティ1世、ラメセス2世、ラメセス3世の墓壁面などに記されている葬祭文書『天体の牛の書』（Book of Celestial Cow）には、最高神であるラー（太陽神）の骨は銀でできており、四肢は黄金、そして髪は本物のラピスラズリで出来ている、と記されている（Assmann, 2001: 113-4）。¹⁰ つまり、古代エジプトにおいて黄金は神の肌の色と同一視され、上述の黄金のマスクは冥界にあっても朽ちることのない永遠の姿を表現する意図を持って作られたものであると言えよう。

古代エジプトでは、黄金を採掘・精錬するためには国家規模での設備投資が必要であり、黄金は王によって独占されていた。王や王族以外の私人が黄金を持つためには、王から褒章として下賜される黄金製品を期待するしかなかった。第18王朝時代のアメンヘテプ1世、トトメス1世、トトメス2世の3人の王に仕えたアハメス・パエンネクトの墓に記された自叙伝には、それぞれの王が褒章として黄金のネックレス、腕輪、護符などをアハメス・パエンネクトに授けたことが記録されている（Urk IV: 32-39）。¹¹ したがって、黄金は王権を頂点とするヒエラルキーの存在を社会に示し、黄金を持つ者と持たざる者の差別化を図るための格好の物質であった。

このような高価な黄金の代用品として使用されたのが黄色であると考えられてきた。実際に、黄金の代用品として使える鉱物としては、雄黄（ヒ素化合物）と黄土（鉄分の多い石灰岩）が挙げられるが、雄黄はエジプトではごく僅かしか産出しなかったため、顔料としての壁画への使用は限られている。一方、黄土は赤土と並んでナイル河畔では入手しやすい材料であったため、私人の墓壁画などに多用されている。

特に新王国時代（アマルナ時代）以降の私人墓では、それまでの墓で多色顔料が使われていたにも関わらず、黄色による彩色が主流を占める墓がある。例えば、トゥトアメン王の高官であったマヤとメリトの墓などである（写真11）。ここでは、墓の上部（地上階）と下部（地下）に壁画が施されているが、地下の冥界にあたる墓室の装飾はすべて黄色と背景色の白色で彩色が行われている。古代エジプト



写真10 トウトアメン王の黄金のマスク背面。死者の書が内側と背面に刻まれている。（撮影 山花）



写真11 サッカーラのマヤとメリトの墓地下の壁画。第18王朝時代（撮影 山花）

の墓は古王国時代から赤・黒・白・青（緑）・黄の多色での装飾が施されていたにも関わらず、新王国時代の特に第 18 王朝末から第 19 王朝時代にかけて黄色一色、あるいは黄色と黒で装飾された墓が出現するのである。

最新の研究によると、美術表現にかけて非常に保守的であった古代エジプト人が、多色装飾から単色あるいは単色に近い装飾を採用するようになった背景には、第 18 王朝時代中期の所謂アマルナ時代から始まった唯一神としての太陽神の信仰の拡大解釈によるものである。アクエンアテン王により断行されたアマルナ宗教改革は、古来エジプトにいた八百万の神々を否定し、唯一神アテン（日輪の神）だけを祀りあげた。その結果、エジプト人にとって重要な冥界の神であるオシリスまでもがその座を追われ、夜の世界は獣や蠍などが跳梁する悪に満ちた世界となった。アクエンアテン王が作ったとされるアテン賛歌には、「汝（アテン神）が西の果てに沈むとき、地は死のごとく闇にとらわれる。（中略）獅子はみなその穴より出で、這うもの（サソリやヘビなど）出でて、人を刺す。」という表現があり、日輪のない世界が危険に満ちていることを物語っている。つまり、オシリスが守っていた冥界の秩序は失われたのである。闇と悪が充満した冥界で死者が安寧に暮らすためには、冥界にまで陽の光を届かせるしかなかった。そこで、墓室に描かれた墓主たちは全身に太陽の光を受けている姿を表現するために黄色のみで彩色された、というのである。前述のマヤとメリトの墓には、被葬者だけではなく、冥界の神オシリスも従来の黒や緑色ではなく、黄色で彩色されている。つまり、オシリスまでもが太陽神に照らされてあの世で太陽の光を受けて復活再生を果たす、というシナリオに変化していくのである。

このように、黄色は常に金色の代用色とみなされており、金の装飾品を壁画や浮彫に表現する際に使われたり、太陽神そのもの、あるいは太陽神によって照らされ、再生復活を果たす被葬者を表現する際に用いられた。

※ 7 ピラミッド・テキスト 第 628 章 C Utterence 366; Sethe, K., *Die altaegyptischen Pyramidentexte nach den Papierabdrucken und Photographien des Berliner Museums*, 1908, Leipzig.

※ 8 ピラミッド・テキスト 第 736 章 C Utterence 473; Mercer, S., *The Pyramid texts*, London, 1952, Thames and Hudson.

※ 9 Lichtheim, M. *The Ancient Egyptian Literature* vol. I, The Old and Middle Kingdoms, 1983.University of California Press.

※ 10 Assmann, J. *The search for God in Ancient Egypt*, translated in English by Lorton, D. 2001.Cornell University Press.

※ 11 Sethe, K. und Helck, W. *Urkunden des Aegyptisches Altertums*, IV. 1914.

注

※ 1 Falikner, R., *The Egyptian Book of the Dead. The book of Going forth by Day. The First Authentic Presentation of the Complete Papyrus of Ani*, 1994, San Fransisco, Chronicle Books

※ 2 Erman, A., *Zaubersprüche für Mutter und Kind aus dem Papyrs 3027 Berliner Museums*, Akademie der Wissenschaften. Berlin, 1901, Königl. Akademie der Wissenschaften.

※ 3 Lichtheim, M., *Ancient Egyptian Literature*, vol. I, 1973, University of California Press

※ 4 Strassler, R.B., ed., *The Landmark of Herodotus, the histories*, 2009, Anchor Books

※ 5 Lichtheim, M. *The Ancient Egyptian Literature*, vol. I, The Old and Middle Kingdoms, 1983. University of California Press.

※ 6 日本でも、「青りんご」、「青信号」などのように、実際には緑色であっても青と呼ぶことが多い。奈良時代の万葉集においても青と緑の明確な区別はなされていない。それは、日本語の「青」が緑を含めた広い色域に対して適用できるため、とされている。古代エジプト語も日本語と同様に、ウアジュが他の青系の色すべて表現できるからであると考える。

アンデス文明概説

吉田 晃章

高度で異なる自然環境

アメリカ大陸に渡った人々は、少なくとも今から1万1千年前にはアンデス地域に到達していたとされる。彼らは狩猟と採集を生業としており、氷河期の終わりとともに環境が変化し、それまでの大型動物の狩猟から、小型動物の狩猟に移行していった。シカやラクダ科動物などを追う狩猟採集民がアンデスで目にしたのは高度によって多様な環境であった。大きく区分すると、乾燥した海岸地域（コスタ）、比較的湿潤な山岳地域（シエラ）、東斜面の熱帯地域（モンタニャ）に分けられるが、ハビエル・プルガル・ビダルはアンデスの自然環境をさらに細分している。乾燥したチャラと呼ばれる海岸地帯の環境では、主に河川が太平洋にそそぐ流域のみで生活が可能であり、その他の海岸地域では寒流による砂漠が広がり居住が困難である。海岸の文化はこの河川流域で栄えた。標高500mから2300mにかけてはユンガ地帯が広がる。ユンガでは年平均気温が18度程度で温暖で果樹やサツマイモ、サトウキビなどが育つが、風土病もある。キチュア（ケチュア）と呼ばれる2300mから3500mの山間盆地になると比較的平均気温は下がるが、いまでもジャガイモやトウモロコシの栽培がさかんに行われている地域である。ケチュアは、ケチュア語やケチュア族のように民族や言語をさす言葉にもなっており、高地の文化が栄えた場所である。インカの都クスコも、約3400mの高地でケチュア地帯に位置している。3500mから4000mにかけては、スニと呼ばれる冷涼な地帯が広がり、根菜類と雑穀のキヌアしか育たない。さらに4000mから4800mの高原地帯であるプーナではジャガイモ栽培に加えリャマ、アルパカなどの家畜が飼育されている（写真1）。これ以上の高地はハンカと呼ばれ、雪をいただく山岳地域となり、人の居住は困難になる。アンデスの東斜面では、400mから1000mのルバルパや400m以下の低地オマグアなど熱帯気候のジャングルが広がっている。狩猟採集民であった彼らは、高度による環境の変化を徐々にまた巧みに利用しながらアンデス文明を形成していく。



写真1 プーナのアルパカの群れ

アンデス文明の形成

紀元前5000年頃（古期）になると、中央アンデスでは、植物栽培や動物の家畜化が始まり、紀元前2500年頃には定住村落が営まれるようになった。農耕における定住よりも海岸部の置ける漁労定住を考えると定住の歴史はさらにさかのぼることができるだろう。アンデスにおける栽培作物

は、トウモロコシ、カボチャ、ジャガイモ、サツマイモ、トウガラシ、キノア（アカザ）、マニオク、トマト、インゲンマメ、リママメなどである。家畜としては、アルパカ、リャマ、クイ（テンジクネズミ）、イヌ、シチメンチョウなどが飼育された。

アンデス文明の歴史は、旧大陸の四大文明に比べ、これまでさほど古くないと思われてきた。しかし、太平洋岸のカラル遺跡の発掘調査によって、アンデス文明の起源は、紀元前3000年から2500年頃まで遡ることができるようになった（写真2）。ルス・シャディが調査したこの遺跡は、海岸部から約20kmのスーペ川



写真2 カラル遺跡（中央ピラミッド）

沿いに位置し、周囲には耕作地が広がっている。遺跡には、大型の祭祀建造物が30以上も立ち並び、神殿に付随する円形の広場や神殿に囲まれた方形の広場が作られた。円形広場からは、鳥の骨を利用した笛などが多数出土しており、神殿における当時の人々の活動が理解できる。またピラミッド状の神殿上部では、火を焚く儀礼が行われていた痕跡が炉から判明している。しかしながら、土器は確認されておらず、先土器期の遺跡であることが分かっている。カラルの人々の暮らしも、調査により徐々に解明されつつある。彼らは綿を栽培し、海から運ばれてくる魚も食べていた。綿の実やカタクチイワシなどの骨も多数出土し、そのことを物語っている。このような状況から綿花は漁網を作るために栽培され、海岸部と盛んに交易がなされていた様子がうかがえる。網の製作により漁獲高があがり、人々の生活が豊かになり、さらなる生産と人口の増大をもたらしたのであろう。戦争などの痕跡は発見されておらず、文明形成の要因として、アンデス地域では農耕はもちろんのこと信仰や交易が重要な役割を果たしていたことが窺える。ほかにもキープやパンパイブなど後世に様々な影響を与えたと思われる文化現象の始まりを見て取ることができる。カラル遺跡の調査からアンデスにおける文明の起源は数百年早まり、旧大陸の文明と同じくらい古いものであることがわかってきた。紀元前1800年頃にカラル遺跡は、乾燥化により砂で覆われ放棄され、大型センターの建設は川の上・中流域に移っていった。

アンデス一帯に広がるネコ科動物の表象

土器が利用される時代になり、アンデス各地に大規模な神殿が建立され、ネコ科動物、ワシ（猛禽類）、ヘビ、ワニなどの動物の特徴を組み合わせたチャビン様式と呼ばれる表現様式が前1400年から400年にかけて中央アンデス一帯に広まった。この様式は、土器、石彫、織物、金細工など様々な媒体に表現された。代表的な遺跡は、北高地の南部のチャビン・デ・ワントルである（写真3）。このチャビン・デ・ワントル遺跡では、ネコ科動物と人間やワシを組み合わせたチャビン様式の図像が石彫や土器などに顕著に認められる。神像を描いたチャビン様式の布なども存在した。布や持ち運びのできる土器などで、急激に図像表現がアンデス一帯に広まったのだろう。神殿の石彫から

は、男女の対称性や、丸や四角の対称性など二項対立が意識される時代となっている。土器でもチャビン様式が広まり、海岸では海岸のチャビン様式と言われるクビスニケ様式が発展し、黒色土器を中心に制作されるが赤色土器もみられる。鍔型壺がみられるようになるのもこのころである。形成期末には、トウモロコシの栽培化やラクダ科動物の飼育などで社会変化が生じ、チャビン・デ・ワンタルのような従来の大型祭祀センターは放棄されたようだ。その後、地方の文化が開花する。



写真3 チャビン・デ・ワンタル遺跡

栄える地方文化

北海岸ではモチエ、南海岸ではナスカ、中央高地ではレクワイなどの文化が栄える。この時期は地方発展期（紀元前後～700年）と呼ばれ、社会の階層化が顕著になり、専門的な職業集団も生まれた時期と考えられている。また、著しい人口増加とともに耕地が拡大された。そのため灌漑施設の整備に多くの労働力が必要となった。水路では、最も長いものは総延長で数十キロにも及ぶものもある。このような大規模な土木工事を行うためには、中央集権的な権力の存在が当然必要であり、地方発展期に興る政体の中には、初期国家と呼べるようなものも現れる。建造物や遺物にも以前とは異なる特徴が見てとれる。



写真4 モチエ遺跡（太陽の神殿）

モチエ川とチカマ川の両河谷を中心に栄えたモチエ文化の中心的な遺跡は、太陽の神殿（Huaca del Sol）と月の神殿（Huaca de la Luna）である。太陽の神殿は、幅342m、奥行159m、高さ40mの建造物で、8期にわたり増築されている（写真4）。後100年頃には建築が開始されており、マイケル・モズリーの推計によれば1億4300万個の日干しレンガが使用された巨大な公共建造物である。一方月の神殿は、自然の丘を利用して建てられた建造物で、幅95m、奥行85m、高さ20mと太陽の神殿よりもやや小さいが、太陽の神殿よりも早く建築が始まった可能性が高い。頂上部は、堀で囲まれており、多彩色の壁画が見つまっている。月の神殿は、それらの図像からも神々と関連する儀式が行われていた宗教的な性格の強い空間であったことがうかがえる（写真5）。この神殿からは、生贄と思われる遺体は何体も発見されており、神に対し生贄をささげる習慣があったことが分かっている。近隣の諸部族との紛争により生贄にする捕虜を獲得していた。政治的・軍事的なリーダーがいたことは確かであり、強力な権力をもつ指導者が存在し、労働力を投下し、神殿建設や灌漑水路など公共施設の建設にあたらせたの

モチエ川とチカマ川の両河谷を中心に栄えた

モチエ文化の中心的な遺跡は、太陽の神殿（Huaca del Sol）と月の神殿（Huaca de la Luna）である。太陽の神殿は、幅342m、奥行159m、高さ40mの建造物で、8期にわたり増築されている（写真4）。後100年頃には建築が開始されており、マイケル・モズリーの推計によれば1億4300万個の日干しレンガが使用された巨大な公共建造物である。一方月の神殿は、自然の丘を利用して建てられた建造物で、幅95m、奥行85m、高さ20mと太陽の神殿よりもやや小さいが、太陽の神殿よりも早く建築が始まった可能性が高い。頂上部は、堀で囲まれており、多彩色の壁画が見つまっている。月の神殿は、それらの図像からも神々と関連する儀式が行われていた宗教的な性格の強い空間であったことがうかがえる（写真5）。この神殿からは、生贄と思われる遺体は何体も発見されており、神に対し生贄をささげる習慣があったことが分かっている。近隣の諸部族との紛争により生贄にする捕虜を獲得していた。政治的・軍事的なリーダーがいたことは確かであり、強力な権力をもつ指導者が存在し、労働力を投下し、神殿建設や灌漑水路など公共施設の建設にあたらせたの

だろう。墓からは貴族や職人の存在も確認されており、チャビンの時代とくらべ、社会の階層化がかなり進展している様子がうかがえる。灌漑による集約的農耕により多くの人々を賄う食糧が得られるようになり、人口も増大したことは容易に想像できる。土器ではクリーム地、または白地赤彩土器が頻繁に作られるようになる。またモチエの南の政体を中心に個人が特定できるような人物の頭部を模した人面土器が作られる。さらに死者や目が見えないなどの障害者も象形土器として作られている。土器に細かい絵を描く、細線画土器も多数制作されるようになった。細線画の土器には神話の場面と思われるものが描かれていたが、近年は発掘から細線画の土器に描かれた神のような装飾品を身につけた人物が墓から出土しており、実在した王様であったのではないとも言われている。いずれにせよ、中央集権的な初期国家が形成されていたのだろう。繁栄し拡大したモチエも紀元後500年代後半の気候変動と乾燥化により衰退したと考えられている。



写真5 月の神殿の壁面装飾



写真6 レクワイの装飾杯
（東海大学文明研究所提供）

モチエと同時代の紀元前後から紀元後約650年にかけてアンカシュ県のカイエホン・デ・ワイラス地方ではレクワイ文化が栄えた。レクワイ文化は山間部で発達したが、代表的な遺跡には、パシャシュ遺跡やハンク遺跡などがあるが、それ以外の遺跡はあまり知られていない。しかし本学の調査団（調査団長 松本亮三教授）が古代の金山開発に関する調査を同地方で実施し、日本の調査団としてははじめてレクワイの遺跡を発掘調査している。レクワイの土器は、微細な白いカオリンと呼ばれる胎土で製作されており、モチエの細線描画土器に見られるようなテーマが立体的に表現されているものもある。とりわけ鳥、猫科動物、人間、超自然的な生き物がモチーフとなっているものが多い。幾何学文様も装飾の特徴となっている。レクワイの土器

は白地に黒色のネガティブ文様と褐色で彩色されているものが多く見られる（写真6）。土器のほかには、石彫も有名であり、この点でチャビン文化の伝統を受け継いでいるとも考えられるが、チャビン・デ・ワンタルにみられるような石彫の洗練された技術あるいは表現は見られない。

一方地上絵で有名なナスカは、海岸部のナスカ川とイカ川流域に栄えた（写真7）。降水量はほぼ1mm未満で亜熱帯の砂漠であるが、伏流水として流れる地下水をプキオと呼ばれる井戸から汲んで灌漑し、集約的な農業を行っていた。根菜類、豆類、トウモロコシ、トウガラシ、カボチャ、落花生などを栽培するとともに、海産資源を有効に活用していた。政治的指導者と宗教的指導者はわかれておらず、いずれもシャーマンがその役割を担っていた可能性が高い。モチエ文化のように「王墓」が発見されておらず、社会の階層化の様子を示す証拠はあまりない。社会は階層化されて



写真7 地上絵（ハチドリ）

いたというよりは、序列のある社会となっていた。王や貴族の存在が窺えない社会で、都市のような機能を持つ大型集落も建設されていなかった。おそらくナスカの人々は、複数の地域集団あるいは首長制社会に分かれて暮らしを営んでいたと思われる。ナスカ文化の遺跡としてカワチと呼ばれる大規模な建造物を伴う遺跡があるが、巡礼センターとして考えられている（写真8）。同時代に栄えた北部海岸のモチェ文化や、中央高地北部のレクワイ文化とは相互に影響を与えることは、ほぼなかった。ナスカでは16色ともいわれる多

彩色土器が登場する。初期から中期にかけては、人間の首級をもつ豊穡神と思しき神が描かれる（写真9）。ナスカ中期以降では戦争に関連するテーマが増加したことが窺え、より力の強い世俗的指導者が出現したことが想像される。戦争や軍事的テーマが多く描かれ、豊穡神が姿を消す。紀元後600-700年頃に南部高地に、のちのワリとティワナクとなる強力な新興勢力が台頭し、ナスカ文化に影響を与えた。ナスカ文化は、ワリの支配下に入り数十年のうちに消滅した。



写真8 カワチ遺跡

ワリとティワナクの拡大

南高地では、ティティカカ湖の南岸でティワナク文化が紀元後100年から繁栄しはじめ、紀元後400年から800年にかけてはティティカカ湖盆地に拡大する。その後、ペルー南部、チリ北部からアルゼンチン北西部までティワナクの影響が及ぶが、大きくなったティワナクの支配地域は紀元後1000年までに次第に縮小し、崩壊していく。文化名称のもとになったティワナク遺跡には、アカバナと呼ばれる建造物、半地下式広場、カラササヤと呼ばれる石壁で囲まれた方形の基壇状構造物などがあり、これらを取り囲むように堀がめぐらされている（写真10）。鳥をイメージしたものの、また防御のためであったのかはよくわかっていない。ティティカカ湖畔では、灌漑農業が営まれ、気温の日格差を利用して作る乾燥イモの技術で、イモを長期間保存することができるようになった。山本紀夫によればティワナクが繁栄する経済的な基盤となった。彼らは温暖なユンガ地域へ拡大していくが、その支配形態は武力を行使したものではなかったのではないかとされている。ユンガ地帯に飛び地を作り、発酵酒にするための原料であるトウモロコシなどの作物を手に入れることが目的だったのだろう。運搬には高地での飼育に適したリヤマが荷駄獣として利用されたこと

写真9 橋型把手付双注口壺
(東海大学文明研究所提供)

は言うまでもない。ティワナクはリヤマを活用し、物流や交易をうまくコントロールすることもできていたのだろう。

一方ペルーではアヤクチョ地方を中心に遅くとも紀元後750年頃から1000年頃までワリ文化が栄える。ワリ文化とティワナク文化は土器に表現される神々の図像から密接なつながりがあるとされる。ワリ文化はワリ遺跡を中心にペルーの北部、中部、南部の一部に影響を及ぼした。ティワナク同様に各地に影響を残しているが、文化的な影響が軍事的な征服によるものなのか、またワリの支配体制がいかなるものであったのかはいまだに議論が続いている。いずれにせよ、ワリの拡大はティワナクと同様に各地の資源を利用するためであったことに相違はないだろう。ワリ遺跡には神殿などの公共建造物が立ち並び3kmを超す広大な区域が存在する。居住区域も含めると15kmにも及ぶ、広大な都市的空間が作られ、他のワリ遺跡でも同様の都市的空間が認められる（写真11）。

都市国家の誕生

海岸部でも1000年頃には都市的な空間が作られるようになる。チムーは紀元後1000年から1476年にかけての地方王国期にモチェ川流域に成立した王国で、ペルー北海岸一帯を支配した。チムーの首都チャンチャンは、現在のトルヒーヨ近郊に位置し、遺跡中心部の面積だけでも約6kmあり、総面積は約25kmにも達する（写真12）。遺跡には、シウダデーラと呼ばれる日干しレンガで作られた壁で取り囲まれた区画が存在する。9つのシウダデーラは同じような構造を持っている。



写真12 チムーのチャンチャン遺跡



写真10 ティワナク遺跡（半地下式広場とカラササヤ）



写真11 ワリのピキリヤクタ遺跡

シウダデーラの中には、行政用の施設や広場、倉庫が建設されている。またシウダデーラの中には王墓が造られている。チムーの社会はモチェと同様に水路の建設により灌漑を行い集約的な農耕で発展するとともに、それ以前のシカン文化などから引き継がれた高い冶金技術で栄えていた。チムーは遅くとも13世紀初めまでに拡大をはじめ、伝説によるとミンチャンサマン王の時代に最大の版図となるが、1476年にインカ

に征服された。高い金属加工の技術を持った職人はインカに徴用され、その技術はインカに引き継がれた。チムーのほかにも、海岸部ではパチャカマやチャンカイ、また高地ではコリャやルパカなどの小国が栄えたがインカに吸収されていき、インカは広くアンデス一帯をおおう国家を建設した。その支配地域は現在のエクアドルを含み、本学の太平秀一教授は長年エクアドルでインカの調査を実施し、インカ支配の実態を解明してきた。

インカ国家

インカはクスコ盆地を中心に栄え、15世紀前半から急速に勢力を拡大していき、アンデス全域をおさめた最後の先住民国家であった。インカの首都はクスコであるが、この町はコリカンチャ(写真13, 14)を中心にハナン(上)とウリン(下)に空間的に二分され、二つの社会組織によって維持される双分制社会ができあがっていた。さらにそれぞれが二分され、四区画で社会が構成されることも認められた。スペイン人は、タウンティンスーコというインカ国家の別称も記している。これは「四つの地方」という意味で、領域も四つの地方に区画されていたことから、社会は分けられるも相互補完的に一つを構成するという概念があったことが理解できよう。広大な国家は総延長4万キロに達するともいわれるインカ道で結ばれていた。つまり情報と物流の網の目が全域に張り巡らされていた。タンボまたはタンブと呼ばれる宿場も設けられており、チャスキと呼ばれる飛脚により、多様な情報を迅速に伝えるシステムも構築されていたようだ。また貢納品や賜り物だけでなく、一般的な交易にもこの道が利用されたことだろう。インカは勢力を拡大する過程で各民族が持っていた技術を継承し、発展させていった。キープと呼ばれる縄の結び目で数を数える道具や段々畑、インカ道などはワリの時代から引き継いだともいわれている。精緻な石造建築技術はティワナクなどから、また冶金技術はシカンやチムーからインカへ受け継がれた。このようにアンデス文明の集大成としてのインカ帝国も、1532年にペルー北高地で王アタワルパが征服者のフランシスコ・ピサロに捕縛され崩壊することとなる。時の移ろいの中で、支配者は変わり国は滅びるものの、先住民の生活は絶えることなく今も続いている。

[写真 6,9 以外は筆者撮影]



写真 13 コリカンチャ（太陽の神殿）



写真 14 コリカンチャ（内部）

アンデス・山の神々の多彩性：

「ワロチリ文書」から読みとる先住民の感性・感覚

大平 秀一

1. はじめに

スペイン侵入以前のアンデス先住民社会は、文字をもたなかった。それが故に、その歴史・過去は、同時代において、彼ら自身の手によって書き留められることはなかった。ところが、「発見」、「征服」、植民地化という歴史を経たが故に、1532年以後になって多くの歴史文書が残されることになる。しかしそれらは、数点の例外を除き、すべて他者であるスペイン人によって書き表されたものである。「クロニカ (crónica)」と称される年代記、支配・管理のための記録、そして裁判文書などに代表されるこれらの文書は、スペイン文化・キリスト教文化の枠組みの中で、一方的に捉えられた先住民社会・文化の記述に過ぎない。

したがって、これらの文書記録には、自然の中で自然と共に生きた先住民の感性や感覚、そしてそれを基に織り成されていた社会・文化の臨場感あふれる姿は、直接的には映し出されてはいない。それが故に、遺跡・遺構や遺物を解釈する上で、これらの歴史文書からはさほど有効な情報が得られるわけではない。仮に得られたとしても、それが本当のことかどうか検証することは困難である。その理由は、スペイン人・キリスト教の眼差し以外で書かれた歴史文書の不在が故に、歴史学の基礎作業である史料批判が極めて困難だからである。しかし、さほどの史料批判を経ずに、延々とこれらの史料が引用され続けてきた結果、エキゾチズムに満ちた怪しげなインカ像やアンデス先住民の歴史像が構築され、そして消費されてきた。

ただしアンデス地域には、17世紀前後に、ケチュア語で書き残された先住民による宗教・儀礼的世界の語りがある。これは、ペルーの首都リマ東方のワロチリ地域で採取されたもので、通称「ワロチリ文書」(Manuscrito de Huarochiri)として知られている。本稿では、この語りを分析して、色彩をめぐる先住民の感性・感覚への接近を試みたい。

2. 「ワロチリ文書」

ワロチリ地域は、リマ東方のアンデス西斜面を太平洋に向かって流れ落ちる、リマック川、ルリン川(パチャカマ川)、マラ川の中流域～上流域に相当する。スペイン人による「征服」以後、アンデス地域では先住民のキリスト教化が徐々に進められていった。植民地支配の基盤を構築した第5代副王フランシスコ・デ・トレードの時代(1569-1581)には、先住民のキリスト教化が一層強化されていく。1582～1583年に、大司教トリビオ・デ・モグロベホにより開催された第3回リマ宗教会議において、改宗区の数を増やし、先住民言語を活用した布教の徹底が決議され、ワロチリ地域にもルリン川上流域を中心とするサン・ダミアン改宗区が設置される。そこに、クスコで生

まれ育ち、ケチュア語に慣れ親しんでいたフランシスコ・デ・アビラ（Francisco de Ávila）が、司祭として赴任することとなった。「ワロチリ文書」は、このアビラが、キリスト教への改宗を目的として、自らの前で同教区の1人あるいは複数の先住民に伝統的宗教等に関して語らせ、それをバイリンガルの先住民書記（Escribano de naturales）に筆記させたものである。文書の中には成立年代が示されていないものの、アビラが赴任していた1597～1608年の間に残されたことは明らかである。これまで、1598年説と1608年説が提示されている。

アビラは、1608年に、「ワロチリ、ママ、チャクリヤ地方にかつており、そして今日も勝手気ままに誘惑して生き続けている誤ったまた間違った神々、ならびにその他の迷信と悪魔儀礼に関する論考と報告」と題された著作をまとめている（以下、「論考」"Tratado"と略記）。この「論考」（"Tratado"）は、章立て・内容ともに合致しているため、「ワロチリ文書」がスペイン語でまとめ直されたものと容易に判断できる。しかしその記述は、8章の冒頭部分で終わっており、未完の状態にある。

1608年は、ワロチリにおいて、伝統的宗教・儀礼とキリスト教の祭祀をすり替えていたことが明みに出、アビラがそれをリマの大司教に報告した年でもある。これにより、伝統的宗教・儀礼の徹底的根絶を推し進めようとする「偶像崇拜根絶運動」（1609～1630年代）へと向かい、初期においてアビラはその中心的な役割を担っていく。「論考」（"Tratado"）の記述をみると、アビラが先住民から聞き取りを行った直後に書かれているという印象を強く受ける。これが妥当だとすれば、「ワロチリ文書」は1608年に成立した可能性が高い。

当然のことながら、支配・管理する側とされる側の関係の中で残された「ワロチリ文書」も、政治性と無縁なわけではない。アビラは、先住民の伝統的な世界を明らかにすればするほど、信仰対象・儀礼道具等を破壊するなど、一層効率的に改宗に向かわせることが可能と考えるだろうし、功績次第では自らの立身出世の道も開けてくる。文書の余白には、アビラによる入念な尋問の痕跡・メモ書きが残されている。一方、語らせられる先住民の側は、自らの社会・信仰を維持するために、真実は極力語らない方がよい。実際、語りの中には、アビラ目の欺くために創出していると思われる箇所、おそらく意図的に錯綜させている箇所なども認められる。

「ワロチリ文書」の中には、リマ県とフニン県の県境に位置する標高5700mを超える雪山パリアカカ（*Pariacaca*）が、最も力を帯びた主神として登場する。またパリアカカの子、妻、抗争相手など、実に多様な神々の名称が示されており、その神々の抗争、破壊、創造、儀礼的世界が語られている。筆者は2010年以降、ワロチリ地域において民族誌的フィールドワークを進めている（大平2017）。これまでに得ている情報によれば、雪山パリアカカの家族関係あるいはその敵として示されていることから容易に想定可能なように、これらの神々のほとんどは山である。

「ワロチリ文書」の翻刻・翻訳は、部分的なものも含めれば、すでに19世紀末から取り組まれており、現在はケチュア語に加えて、スペイン語、ドイツ語、英語で読むことが可能である。それらの中で、研究者に中心的に引用されてきたのは、ホセ・マリア・アルゲダスによるスペイン語訳[Arguedas 2007[1966]]、ジェラルド・タイラーによるスペイン語訳[Taylor 1987;2008]、そしてフランク・サロモンとユリオステによる英語訳[Salomon & Urioste 1991]である。本稿における文書記述の引用では、タイラーのスペイン語訳を示し、必要に応じてアルゲダスやサロモンらの訳を提示する。

3. 「ワロチリ文書」の中の色彩語

「ワロチリ文書」として残されたケチュア語の語りの中には、色彩を示す名詞・形容詞、そしてその色彩への変化を言い表す動詞が認められる。それらの言葉は、元々おそらく多様な意味合いを有していたはずだが、少なくとも一部では色彩語のカテゴリーに含めてよいと判断されるものもある。それらを語幹で示すと、"*chumpi*"（チュンピ）、"*quillu, quellu*"（ケリュ）、"*puca*"（プカ）、"*yana*"（ヤナ）、"*yurac*"（ユラク）、"*ancas*"（アンカス）、"*chicsi*"（チクシ）の7語である。

アンデス地域に渡ったスペイン人たちは、早くから土着の言語に関心をもち、断片的にしろそれらを書き留めていく。キリスト教化の過程では、当然先住民言語の使用・理解が、重要な位置を占めていった。特にインカ国家の拡大と共に各地に広がったケチュア語への関心は高く、征服から30年も経ずして文法書・辞書が編纂されている。前述した第3回リマ宗教会議（1582-1583年）では、先住民言語（ケチュア語・アイマラ語）による『公教要理』と『告解書』の作成が定められ、またその文法書と語彙集・辞書の出版の必要性も検討されている。以後、1640年代にいたるまで、ケチュア語の文法書・辞書が集中的に作成されていった。

植民地時代に作成された文法書・辞書の中で、言語学的に特に重視されてきたものは、1560年にドミニコ会士のサント・トマスがスペインのバリャドリで出版した『ペルーの共通言語に関する辞書・語彙集』と、イエズス会士のゴンサーレス・オルギンが1608年にリマで出版した『ケチュア語という全ペルーおよびインカの共通言語語彙集』の2つである。これらの辞書で、上述した7語の色彩語とそれに関連した多数の言葉・表現を引くと、例外なく、「ケリュ（*quillu, quellu*）」に黄色（系）、「チュンピ（*chumpi*）」に茶色（系）、「プカ（*puca*）」に赤色（系）、「ヤナ（*yana*）」に黒色（系）、「ユラク（*yurac*）」に白色（系）、「アンカス（*ancas*）」に青色（系）そして「チクシ（*chicsi*）」に灰色（系）の意味を付与している。

文化相対主義の言説により、それぞれの言語の単語・言葉の意味は、それが話されている社会・文化そして言語によって異なるものだというイメージは、現在でも我々の脳裏に焼き付けられている。これまでの文化人類学の記述でも、構造人類学や象徴人類学の領域を中心として、色彩のシンボリズムに関する社会の独自性・恣意性が多く示されてきた。こうした恣意性を前提とした場合、例えばケチュア語における色彩語の意味を他の言語で示すこと自体、意味をもたないということになる。

一方で、文化人類学者のバーリン・プレートと言語学者のケイ・ポールは、計20の言語に関してインフォーマントによる色彩語の調査を通して、言語によって基本の色彩語の数は異なるものの、普遍的に色彩を分類する11種あるいはそれ以下の基本カテゴリーがあり、基本の色彩語の存在を主張している[バーリン・プレート & ポール・ケイ 2016:4-21]。それらは、白色、黒色、赤色、緑色、黄色、青色、茶色、紫色、ピンク色、オレンジ色、灰色である。彼らは、人間が色彩の境界線や領域より、カテゴリーの焦点色をピンポイントに指すということも指摘しており、脳が色空間の中から色彩カテゴリーを認知する際、広い領域ではなく、「点」（ごく狭い範囲）で受け止めている可能性も示唆している。本稿では、この立場にたって、16世紀～17世紀に編纂されたケチュア語・スペイン語辞書を基に、ケチュア語の色彩語に上述したような日本語をあてて「ワロチリ文書」の色

彩観念を捉え、色彩カテゴリーの境界線が問題となるような議論は行わない。

4. 山の神々の世界の多彩性：「ワロチリ文書」にみられる色彩と感性

「ワロチリ文書」の中で、色彩をめぐって極めて示唆的な記述が残されている章の一つが、5章である。そこでは、「昔、バリアカカが、どのように5つの卵の形で、コンドル・コトという山に現れたのか、そして何が起こったのか」というスペイン語タイトルが後に加えられており、冒頭に「ここでバリアカカの起源の話を始める。これまでの4章において、すでに昔生きていた生き物を詳述した。しかし当時の人々の起源、そして彼らがどこから出現したのかはわからない」と、おそらくはアビラからの質問に語り手が答えた部分を書き留められた上で、主神バリアカカが誕生する遠い過去の物語が始まっていく。

[当時生きていた人々は、互いに戦いまた争ってばかりいた。彼らは、強き者と豊かな者のみを統治者（クラカ）と考えた。我々は、彼らをブルム・ルナと呼ぶ。²]バリアカカが、コンドルコト山で5つの卵から生まれたのは、この時代だった。伝えられるところによると、やはりバリアカカの息子であった、ワティヤ・クリ（*Huatya Curi*）という一人の貧しい男が、その誕生を見て知った最初の者だった。³彼がどのようにそれを知ったのか、また彼が行った多くの不可思議なことを話そう。当時の人々は、彼が貧しく、ワティヤのジャガイモ（土中の穴で焼いたジャガイモ）だけで生きていたので、ワティヤ・クリと呼んだといわれている。⁴その頃、とても力に満ちて裕福な首長である、タムタ・ニャムカ（*Tamta Ñamca*）というもう一人の男がいた。彼の家は、カサ（*cassa*）とカンチョ（*cancho*）という種類の鳥の羽毛でびっしりと覆われていた。彼は、黄色、赤色、青色の、つまり考え得るあらゆる多様なリヤマを所有していた。この男のすばらしい生き様が知れ渡ると、彼に敬意を払って崇拜するために、すべての村から人々がやって来た。そして彼は、本当はわずかな知識しかなかったにもかかわらず、偉大なる賢人であるかのようなふりをし、たいへん多くの人を欺いて生きていた。それから、予言者や神のふりをしていたそのタムタ・ニャムカという男が、とても重い病気にかかった [Taylor 2008:32-33] (筆者訳、[] 手稿のママ、丸括弧筆者)。

この語りでは、まず主神バリアカカが生まれる当時の人々は、強くまた豊かな者が、クラカ（統治者）になると考えていたとし、その一人としてタムタ・ニャムカの様子が示されている。彼の力や豊かさは実は偽りのものだったが、そこに示されている様態は、「統治者」・「強き者と豊かな者」に対して抱かれていたイメージに他ならない。彼の家は、鳥の羽毛で覆い尽くされているとあるものの、その色彩に関しては明言されていない。しかし直接聞き取りをしたアビラは、この語りをスペイン語でまとめ直した「論考」("Tratado")の5章において、次のように述べている。

この頃、非常に豊かで偉大な首長である [空白] という名の一人のインディオがいた。彼は、上述した5つの卵が現れた所から1レグア半(約8km)のアンチコチャに家を持っていた。

その家はとても豊かで、不思議なほどに飾られていて、屋根は多様な鳥の黄色や赤色の羽毛ででき、覆われているほどだった。同様に、とても不思議なことに、壁も（羽毛に）覆われており、床にも（羽毛が）敷き詰められいた。そして、たいへん多くの土地の羊・リヤマを持っており、それらは赤色のものや青色のもの、そして黄色のものなど、とても美しい多様な色のもので、クンビ（*cumbi*）あるいはその他の織物をつくるために、毛を染める必要がないほどだった。同様にその他のたくさんの富そして財産を持っていた [Ávila 2007[1608]:203-204] (筆者訳、丸括弧筆者)。

アビラは、この原稿の執筆時にその偉大な首長の名前を思い出せなかったようで、後で書き込むために空白が設けられている。そこに入れられるべき名前が、タムタ・ニャムカであることは疑問の余地がない。アビラの記述にしたがえば、タムタ・ニャムカの家は、その屋根に留まらず、壁や床も含め、不思議なほど多彩性に満ちた羽毛で覆い尽くされていたことになる。上に引用したタイラーは、「カサ」と「カンチョ」をその羽毛を取る鳥の種類と解釈している。一方サロモンらは、「彼自身の家も他に所有する家も、鳥の羽毛で屋根が葺かれていたので、カサとカンチョという羽毛付き織物のように見えた」と織物の名称として捉え、その家の様態を形容するメタファーと解釈している [Salomon & Urioste 1991:54-55]。後述するように、これらの語は5章後半において、「今度は、カサとカンチョというこの上なく上質の羽毛で着飾る競争だった。……父(バリアカカ)は彼に、雪の衣服を与えた。……」という衣服の競争場面でも示されている。加えてアビラの「論考」("Tratado")では、この箇所「この上なく美しい、多様な色の羽でできている」というメモ書きが加えられている [Ávila 2007[1608]:207]。

この「カサ」というケチュア語は、極めて興味深い意味を有している。20世紀にクスコのケチュア語 - スペイン語辞書を編纂しているホルヘ・リラは、「入口、山や壁の開口部」「縁が欠けること」「破壊（裂け目）により落ち込んだ部分」「壊れたもの、縁にできる隙間」という説明を加えている [Lira 1945:396]。さらにゴンサーレス・オルギンは、「*Ccassani*」に「縁を欠く」という意味を与え、さらに「Puerto de montes」（山の入り口）というスペイン語の見出しに「*Ccassa vrcu*」（カサ・ウルク [山のカサ、すなわち山の開口部]）というケチュア語を与えている [Gonzalez Holguín 1989 [1608]:302,645]。

アンデス先住民社会において、世界は「カイ・パチャ（*cay pacha*）」(この世界 / 地上世界)と「ウフ・パチャ（*uju pacha*）」(下の世界 / 地下世界)という二つに分けて捉えられている。下方にイメージされるウク・パチャという地下世界は、神々だけの領域である。岩の裂け目や洞窟は、泉や湖そして湿地帯などと共に、地上世界であるカイ・パチャとウク・パチャを繋ぐ場所として捉えられている。神々の力が強くおよぶそれらの場所は、畏怖の観念がもたれ、信仰の対象・儀礼の場となる。したがって、羽毛と関連する「カサ」は、神々の世界と深く関わる語であり、神々の特性・要素が含蓄されていることになる。

「ワロチリ文書」の5章において、「カサ」と「カンチョ」という語の併記は、オリジナル手稿67頁表面と69頁裏面の2箇所にも認められる。後述の引用箇所と相当する69頁裏面をみると、「*cancho*」（カンチョ）と鮮明に読み取れる一方で、前述した引用箇所の67頁表面をみると、

"*canch* " と最後の文字が完全につぶれた状態になっている。⁷したがって、これまで「ワロチリ文書」の手稿の翻刻・翻訳を行ってきたアルゲダス、タイラー、サロモンらは、当然 69 頁裏面より判断して、この語をカンチョ ("cancho") と読み取ったはずである [Arguedas 2007:26-27; Taylor 1987:86-87; Salomon & Urioste 1991:55,163]。

「カンチョ」をそのままの音として捉えれば、他の歴史文書の記述・ケチュア語辞書への収録は一切確認できない。「ワロチリ文書」を書き残した先住民書記が、誤った綴り（音）を示している箇所は少なくなく、それらは翻刻・校定者らによって指摘・修正された上で、スペイン語や英語等に訳出されている。仮に、"cancho" の最後の母音を "o" ではなく "a" と考えれば、"*cancha*" (カンチャ) となる。ホルヘ・リラの辞書は、" '*KANCHA*' を「輝き、きらめき、光彩、発光を得ること」と説明している [Lira 1945:356]。ゴンサーレス・オルギンの辞書では、同じ語幹を伴う "*Ccanchariy*" (カンチャリイ) を「光あるいは雷」、"*Ccancharini, ccancharani*" (カンチャリニ、カンチャニ) という見出し語に「照らす」、「光を帯びさせる」、そして「衣服で輝く」という意味を与えている [Gonzalez Holguin 1989 [1608]:62]。

加えてサント・トマスも、"*Alumbrar con candela*" (灯りで照らす) というスペイン語の見出し語を "*cancharini*" (カンチャリニ) とし、また "*Alumbrar con claridad*" (明かりで照らす) を "*illarini*" (イリヤリニ) として "*Alumbrar cō lumbre*" (光で照らす) を "*cancharisca, o yllarisca*" (カンチャリスカあるいはイリヤリスカ) と説明し、アンデスにおいて神観念と深く関わり、光り輝くものや傑出したものを意味し、山の神々の力を媒介する石製の儀礼道具・護符の名称でもある「イリヤ」と「カンチャ」を併記している [Santo Thomas 1560:f9v]。したがって、両者は同質的な意味をもつ語であったことが示唆されよう。

おそらくこの "*cancho*" (カンチョ) は、次の校定において、"*cancha*" (カンチャ) と修正されてしかるべきであろう。また、「鳥の種類」と捉えているタイラーの解釈は誤りで、羽毛を付した織物と関連付けているサロモンらの解釈の方が、的を得ていることになる。スペイン侵入以前に製作された羽毛付き織物は、特にペルー海岸部の墓から多数出土しており、それらのほとんどは多彩性を伴っている (本図録 60 頁参照)。よって、「統治者」、「強くまた豊かな者」は、多彩性を伴って捉えられていることが示唆される。

「カサ」と「カンチャ (カンチョ)」というケチュア語の意味合いを考慮すれば、タムタ・ニヤムカの色彩に満ち溢れた羽毛の家を形容する、「カサとカンチョという羽毛付き織物のように見えた」というメタファーは、「神々の世界の光り輝く羽毛付き織物のように見えた」あるいは「神々の世界の光り輝く多様な色どりのように見えた」と解釈することが可能となろう。

引用部分の記述をみると、「統治者 (クラカ)」、「偉大な首長」、「人々 (人間)」、「男」、「人生」、「病気になる」、「そして「神であるかのような振り」などといった表現から、タムタ・ニヤムカがあたかも人間であるかのような印象を受けてしまう。ところが例えば 10 章において、タムタ・ニヤムカの年少の娘は、ワロチリのすべての人々が「母」と呼び信仰の対象とする「チャウビ・ニヤムカ」という神として示されているし、また同章と 13 章において、彼女の 4 人の妹の名が挙げられており、その内の一人「ウルパイ・ワチャック」は、2 章でパチャカマックという力をもつ神の妻であることが示されている。この「神」であるかのようなという表現は、ケチュア語ではなく、「dios」

(ディオス) という「(唯一無二の絶対性を帯びたキリスト教の) 神」を意味するスペイン語が用いられている。おそらくアピラ神父に向けて、数ある神々の中で「最も力のある神であるかのような振り」というニュアンスで語られたと考えられる。

以上の点より、タムタ・ニヤムカが、山の神々の一部として語られていることは、疑問の余地がない。アンデスの山の神々は、擬人化されて表象される。神々には、人間と同様に性差や家族構成がある。食欲・性欲を持ち、実際に食べて性行為にもおよび、みんなで話しもするし聞きもする。不機嫌・ご機嫌 (満足)・怒り・喜びといった多様な感情も持ち合わせ、いたずらもするし抗争もし、そして病気になるし死にもする。こうした特徴のすべては、「ワロチリ文書」の中に示されている。我々読者が、タムタ・ニヤムカが人間であるかのような錯覚を受けてしまうのは、語り手の先住民が山の神々に人間と同じ属性を与えているからに他ならない。目の前で語らせていたアピラもこの点を読み取れず、「論考」("Tratado") において「 [空白] という名のインディオがいた」と、誤って人間として捉えてしまっている。

したがって、「統治者 (= 上位の者)」、「強き者と豊かな者」とは、山の神々の力・豊かさの優劣をめぐって述べているのであり、羽毛に覆われた状態、換言すれば輝きと多彩性に満ち溢れた状態とは、山の神々あるいはその領域・世界の属性・特性が示されていると判断される。その世界が多彩性を伴って捉えられていることは、多彩な羽毛の家の記述から連続してなされる、赤色、青色、黄色などのあらゆる色の毛をもつリヤマ、アピラの形容を借りれば、織物をつくるために染色が不要なほど多彩な毛をもつ、とても美しいたくさんのリヤマが所有されていることからもうかがうことが可能である。

山の神々が多彩性と輝きのシンボルである鳥の羽毛と深く関わっていることは、実は「タムタ・ニヤムカ」という神の名称そのものにも示されている。「ワロチリ文書」の中には、「ニヤムカ」を伴う神々の名称が多く示されており、おそらくその語には山の神々の観念と深く関わる重要な意味が込められているはずである。しかしその語のもつ意味は、今のところ不明瞭である。一方、「タムタ」に関しては、サン・ダミアン村でなされるマチュア・ユンカという祭に関して語る 24 章において、男性が身に付ける襟あるいは首筋を飾る羽毛製の装身具の名称としても用いられている。さらにアピラ以後、ペルーにおける偶像崇拜根絶運動の中心的役割を担ったパブロ・ホセ・デ・アリアガは、その報告書・手引書の中で先住民の祭に関して次のように述べている。

これらを行う際、クンビという持っている中でもっともよい衣服を身につけ、頭にはチャクラヒンカと呼ばれるいくつかの半月形の銀飾りやワマと呼ばれるものを付け、そしてティンクルバと称されるいくつかの丸い皿状のもの、そして銀板を付けたシャツ、銀のボタン状のものやコンゴウインコの多様な色の羽毛を付けたワラカ、ワクラスまたはところによってタムタ (*tamta*) と呼ばれる羽毛の襟飾りを身に付ける。これらすべての装身具は、この祭のために保管されている [Arriaga 1968[1621]: cap.5] (筆者訳、丸括弧筆者)。

「タムタ・ニヤムカ」は、まさに「羽毛・ニヤムカ」であり、たとえ地域で最大の力をもった山の神ではなかったとしても、その名の一部には多彩性と輝きを伴う山の神々の属性が冠せられてい

るのである。

ケチュア語には、多彩性そのものを意味する「パウカル (*Paukar*)」という言葉がある。よって先住民が、その様態を意識していることは明らかと思われる。ゴンサーレス・オルギンは、その複数形である "*Paucarcuncuna*" (パウカルクナ) に、"*Diversidad de colores de plumas o de flores o de plumajes*" (羽毛、花、羽飾りの色の多様性) という意味を与えており、この言葉を含む、色や神観念と関わる多様な表現を採取している [Gonzalez Holguín 1989 [1608]:281-282]。花は、おそらく羽毛と同じような意味合いで捉えられており、アンデスの祭祀・儀礼において、極めて象徴的な意味をもって使用される、必要不可欠な要素である。多彩色の鳥と花は、虹やピューマと共に、植民地時代の木製カップ・ケーロの主要なモチーフの一つでもある。なお「パウカル」は、例えばクスコ北西部のパウカル・タンボに代表されるように、地名や人名にも用いられる。

色彩に溢れた状態が、神観念と深くかかわっていることは、5章の引用部分から連続する語りの中でさらに確認することができる。主神パリアカカの息子で、孤独で貧しいワティヤ・クリは、リマ南方のシエネギーリヤに降る丘の上で寝ている際、上からやって来たキツネと下からやって来たキツネの会話を耳にし、タムタ・ニヤムカの病気の原因を知る。それは、彼の妻が姦通を犯したが故に、家の屋根にヘビが巣をつくり、また石臼の下に双頭のカエルが住んでいることだった。ワティヤ・クリはタムタ・ニヤムカの所に向かい、その病気を治す見返りとして、彼の年少の娘を要求する。そしてその病気の原因を取り除いて快方に向かわせると、その娘と性的関係を結ぶ。それを知り、激怒した年長の娘婿がワティヤ・クリに戦いを挑み、二人は抗争・競争を繰り広げていく。抗争とはいっても、それは暴力性を伴うものではない。その場面はまず酒を飲み、踊る競争から始まる。ワティヤ・クリは、父パリアカカ(山)の助言を受けてその戦いに勝利し、それからさらなる抗争・競争が続いていく。

ワティヤ・クリがこの競争で勝ったので、翌日もう一人の男は別の競争を望んだ。今度は、カサとカンチョというこの上なく上質の羽毛で着飾る競争だった。もう一度、ワティヤ・クリは父に相談に行った。父は彼に、雪の衣服を与えた。彼は、(その衣服で)あらゆるものの目を眩ませ、競争相手に勝利した。

それからもう一人の男は、ピューマ(の皮)を着るよう挑発した。持っていたピューマの皮を着て、勝ちたかったのだ。父の忠告に従い、貧しい男は早朝に泉に行き、そこから赤いピューマ(の皮)をもってきた。赤いピューマ(の皮)で踊っていると、今だに空に見えるものと同ような虹が現れた。..... (中略)

これらすべてに勝った後、貧しい男は、父(パリアカカ)の忠告に従い、競争相手に言った。「兄弟よ、もう何度もお前の挑戦を受けてきた。今度はお前が私の挑戦を受ける番だ」。裕福な男は受け入れた。それからワティヤ・クリは言った。「今度、青いクスマ(*cusma*)と白い木綿のワラ(*huara*)を着て踊ろう。もう一人の男は受け入れた」。裕福な男は、はじめからそうだったように、最初に踊った。彼が踊っているとき、ワティヤ・クリは大声をあげて走っていき、そこに割り込んだ。裕福な男は驚き、鹿に姿を変えて逃げていった。その妻は男を追っていき、「私の夫の傍らで死のう」と言った [Taylor 2008:38-41] (筆者訳、括弧筆者)。

すでに考察を加えた「カサ」と「カンチョ」という羽毛付き織物をめぐる競争は、「神々の世界の光り輝く多様な色どり」・豊かさ・力の競争に他ならない。その競争に、ワティヤ・クリは父パリアカカが与えた「雪の衣服」を纏い、ぎらぎらと光輝き目を眩ませて勝利している。よってその勝敗は、輝きの優劣・強弱によって決着していることがわかる。もちろんそれは、そのまま山の神々の力の優劣・強弱として捉えることができる。その次の「ピューマの皮」の競争では、やはりパリアカカから与えられた「赤色」の皮を纏ったワティヤ・クリが勝利を収めている。さらに続く「青色のクスマ(貫頭衣)」、「白い木綿のワラ(腰~脚に身につけるもの)」を纏って踊る競争も、前から続くコンテクストを考慮すれば、その色彩と神々の力をめぐる感性・感覚との関係性が強く示唆される。

5. おわりに

ワロチリ文書を詳細に分析していくと、本稿で分析対象とした箇所以外にも、山の神々と色彩をめぐる感性がいくつか拾い出せる。パリアカカが生まれる前の始原的な状態にある世界は、山の神々の世界として捉えられており、その空間に存在するあらゆる鳥は、すばらしい美しさをもつ、黄色や赤色のオウムやオオハシである(1章)。パリアカカやその息子たち(=他の山の神々)は、怒ると赤色や黄色の雹、同じく赤色や黄色の雨、そして雷・稲妻となって破壊的な行為をしている(6章、8章、11章、26章)。さらに人間を生み出すことを考えたり、供物を食べてエネルギーに満ち溢れた状態になった神々は、その可視化されたカマック(エネルギー)と思われる煙のような青いもの/緑青色のものを口から吐き出している(8章、23章)。さらに、リヤマに活力を付与するヤカナという、夜に空中を動き回る真黒な存在は、上述したタムタ・ニヤムカの語りと同様に、青色、白色、黒色、茶色の多彩で大量の毛となって押し寄せてくる(29章)。このヤカナは、天の川の中で、恒星の輝きの狭間に見える黒い部分・暗黒星雲という指摘もある。筆者は、ワロチリ地域において、その天の川は山から山にかかる夜の虹だと聞いたことがある。

真黒である一方で多彩性を伴うというイメージは、現代に生きる我々にとっては、大きな矛盾を伴うように思われる。地下にイメージされる神々の世界は、当然、暗黒・暗闇という観念をも伴う。それは、「ワロチリ文書」で語られる「ヤナ・ニヤムカ(*Yana Ñamca*)」(黒・ニヤムカ)「トゥタ・ニヤムカ(*Tuta Ñamca*)」(闇・ニヤムカ)「トゥタイ・キリ(*Tutay Quiri*)」(闇・流血/吸血)といった山の神々の名称、そして「ヤナ・プキオ(*Yana Puquio*)」(黒い泉)「トゥタ・コチャ(*Tuta Qocha*)」(闇の泉)「ヤナ・カカ(*Yana Caca*)」(黒い岩)といった山の神々と密接な関係をもつ地名からもうかがえる。しかし、これまで見てきたように、その暗黒・暗闇の世界は、一方で眩いばかりに光り輝き、そして多彩性に満ち溢れた世界としても捉えられているのである。

アンデス先住民社会において、虹は山の神々と深くかかわる自然現象の一つで、植民地時代にスペイン人が残した文書にも多く述べられている。また先にも触れたように、植民地時代に製作された、チチャというトウモロコシの発酵酒を飲む際に用いられるケーロという木製カップにも、主要なモチーフとの1つとして示されている。それらの虹は、多くの場合、下方に描かれるピューマの

口あるいは髭から上方に向かって伸び、空を覆っている。いわば山の神を表象するピューマが地下世界にあり、そこから地上世界に飛びだし、空を覆っていると解釈することが可能である。虹をめぐっては、現代の民族誌もいくつか採取されている。

それらの民族誌によれば、虹は一つの泉から現れて空に弧を描いて、大地あるいは別の泉に埋もれていくという。前述したように、泉は神々の世界への入り口でもある、空に広がった虹は、悪意を抱いて動き回り、概して男性から泥棒を働き、また性器を通じて女性の腹部に入り込んで病氣や妊娠の原因ともなる。だから、虹が出ているとき、放尿することは禁忌となる〔Urton 1981:87-90〕。尿を通じて、大地と体が繋がるからである。さらに、虹には両性を持ち合わせたウルクチナンティンと、男性性を帯びたワンカル・クイチがあるという。前者は、女性性を帯びたものが赤く見え、男性性を帯びたものが青く見えたとされ、特に女性にとって危険となるのだそうだ。後者は、赤色や青色のものを盗む泥棒として軽蔑されており、その上を雷や稲妻とも深い関係性をもつと捉えられているコワという黒猫あるいは「アブ（山の神）の猫」が登っていくのが見えるという（Casaverde 1970:171-172; Urton 1981:87-90）。これらの民族誌の記述は、「山の神の猫」というキーワードが明示されているにもかかわらず、おそらくクロニカの影響を受けて、虹を単独の現象・神観念として捉えており、山の神々との関連性は意識されていない。

アンデスにおいて、虹は基本的には雨期にみられる現象である。雨期は、すべての生あるものが、活力に満ちた状態と捉えられており、それは山の神々・地下世界も同様である。その時期に、地上世界と地下世界を繋ぐ場所である泉や湿地帯に発し、そして別の泉や湿地帯に潜り込んでいくのだから、虹は地下世界・山の神々の世界の要素である多彩性が、勢い余って飛び出してきたものと捉えることが可能である。よって、虹は山の神々の力・活力・エネルギー（カマック）そのものといつてよい。これにより、上述した引用部分において、父バリアカカ（の世界）から受け取った力漲る赤いピューマの皮を着て踊っていると、虹が現れたという語りも解釈可能となる。虹・山の神の力は、様々な形で人間に影響を与える。山の神々は両義性を帯びており、豊穰・繁殖・幸運といった肯定的な現象をもたらす一方で、病氣・死・不幸という否定的な現象にも作用するのである（大平2002）。

アンデスの祭祀において、伝統的な要素を伴う踊りでは、頭部に多彩な羽毛飾りが付され、多彩かつ色鮮やかな装飾、輝きをもつ装飾が付された帽子や衣服が身に付けられる。また運動会の万国旗のように、紐に連ねられた多彩色の小旗も飾りつけられる。そして、踊りや行進の列の先頭では、多くの場合、責任を伴う立場にある熟年者が、虹のような多彩性を帯びた旗を持ってゆったりと振りかざす。こうした要素は、山の神々をめぐる色彩・多彩性の観念が、そのまま表象されていると考えてよいだろう。旗は、決してヨーロッパ/スペインの要素ではない。ゴンサーレス・オルギンは、"Pendón o vander de guerra"（旗あるいは軍旗）というスペイン語に「アウカイ・ウナンチャン（*Aucay vnanchan*）」、そして"Pendónero alférez mayor"（祭の行列の熟年の旗手）というスペイン語に、「アウカイ・ウナンチャ・カマヨク（*Aucay vnancha camayok*）」というケチュア語をあてている〔Gonzalez Holguín 1989 [1608]:623〕。これにより、旗に相当する物質が、スペイン侵入以前より、アンデス先住民社会に存在したことが強く示唆される。その物質としては、アンデス地域から多数出土する多彩な織物が、当然想起されてよい（本図録 61 頁参照）。

山の神々の世界は、そのまま死者の世界と捉えてよい。「ワロチリ文書」の語りでは、死者をバリアカカに届ける（9章）死者がバリアカカに会いに行こうとしている（27章）と述べられており、死者が山の神々の世界に向かうことは明らかである。ワロチリ以外でも、死者が山に向かうことは、ペルー南部高地のコロプナ山に代表されるように、歴史文書や民族誌の中で明記されている（Arguedas 1956:227-228）。死者には、多彩性を伴う羽毛・織物・土器・装身具、そして光り輝く金・銀・銅などの金属製品が副葬されるほか、時には墓に多彩な鉱物そのものが添えられることもある。逆に考えれば、そうした無数の死者の集合体・「堆積」空間であるが故に、山の神々の世界は多彩性がイメージされると捉えることも可能であろう。

もちろん、地下世界・大地そのもの、そして山そのものも、実際に多彩性を帯びている。アンデス高地で発掘調査をすると、実に多様な色の土が出てくる。発掘調査時に書き留めた筆者のフィールド・ノートを見ても、「黒色土、赤色土、茶色土、黄色土、白色土、緑色土、赤褐色土、黄褐色土」等、実に多様な色の土層メモが残っている。アンデスの山奥を行くと、例えば車道の断面に、多彩なる土の層位が折り重なっている場所もある。また山そのものも、季節と光の加減によっては、多様な色を伴って極めて美しく見えるところもある。近年、観光客にも知られるようになり、「レインボーマウンテン」と称されているクスコ南東部のビニクンカ（Vinicunca）山は、その一例である。人がほとんど通らない山奥で、雨期に多様な花が一面に咲き乱れる景観も、もちろん多彩性に満ち溢れている。

先住民の感性・感覚への接近を試みると、彼らの社会・文化・歴史の理解、無文字社会が故に具体的情報に乏しい遺跡・遺構・遺物に残された表象の理解を、一層深めることが可能となるであろう。上に示した事象は、今後さらに考察・検証を加えるべき、その可能性の一例である。

【謝辞】

本稿は、2017年6月に開催されたアンデス・アマゾン国際シンポジウム（Simposio Internacional de los Andes y Amazonía）における口頭発表 El concepto de colores en el "Manuscrito de Huarochiri" y el arco iris（「ワロチリ文書」における色彩の観念と虹）を大幅に改編し、その一部をまとめ直したものである。本稿には、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表者：青山和夫、課題番号 26101001）およびその中の公募研究「アンデス先史文化の継承性に関する実証的研究：インカ時代～現代」（研究代表者：大平秀一、課題番号 17H05114）の研究成果が反映されている。国際シンポジウムならびに新学術領域研究の様々な研究会・講演会において、参加者からいただいた多数のコメントに深謝申し上げます。

注

- ※1 この他に、儀礼に使用される緑青色の石・岩を意味する "llacsa" (リャクサ) が、その色の意味も含めたようなニュアンスで用いられている箇所がある (23章)。また、アंकাস (ancas) とスペイン語の青を意味する "azul" (azul) が併記されている箇所もある (8章)。
- ※2 ブルム・ルナは、「野蠻な状態にある人間」といった意味を帯びる。

※ 3 「ワティヤ」とは、土中の竈で蒸し焼きにしたジャガイモ・イモ類を意味する。「クリ」は黄金・豊かな状態・価値のあるものを指す。山の神々が豊かさと貧しさという相反する特徴を併せ持つことは、「ワロチリ文書」の中にも示されている。

※ 4 息子（ワティヤ・クリ）による父（パリアカカ）の誕生の目撃は、一般的な観念では起こり得ないが、ここでは山の神々の神話的世界が語られている。

※ 5 アルゲダスは、この「カサ」と「カンチョ」を個別的に訳出しておらず、単に「最上の衣服」というスペイン語を充てている [Arguedas 2007[1966]:33]。

※ 6 手稿は、以下の URL において、マドリー国立図書館(Biblioteca Nacional de Madrid)が公開しているデジタル・アーカイブによって確認することができる。該当ページは写真 69 の上から 4 行目。http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000087346&page=1

※ 7 複数あるケチュア語の「カ」行系の音の表記は、辞書の編纂者により、「k」が用いられる場合と「c」が用いられる場合がある。

※ 8 Taylor [1987:109] は、この部分は、「赤いピューマで踊ると、今日空に虹が出るように、虹が出た時、踊った」と、語りが反映されて入り組んだ表現となっている。なおアピラは、「論考」("Tratado") において、ピューマの頭の周りに虹のようなものが立ったのが見えたと記している [Avila 2007[1608]:207]。なおアルゲダスは、ピューマの皮で「踊る」ではなく、「歌う」と訳出している [Arguedas 2007[1966]:35]。

※ 9 アルゲダスは、青いワラと白い貫頭衣と捉えている [Arguedas 2007[1966]:35]。

参考文献

Arguedas, José María

1956 "Puquio, una cultura en prozeso de cambio." *Revista del Museo Nacional*, Tomo XXV, pp.184-232.

Arguedas, José María (trans.)

2007 *Dioses y hombres de Huarochirí: Narración quechua recogida por Francisco de Ávila [1598?]*. Universidad Antonio Ruiz de Montoya, Lima.(first published in 1966)

Arriaga, Pablo José de

1968[1621] "Extirpación de la Idolatria del Piru". *Biblioteca de Autores Españoles*, tomo CCIX, Crónicas Peruanas de Interés Indígena, pp.191-277, Ediciones Atlas, Madrid.

Ávila, Francisco de

2007[1608] "Tratado y reración de errores, falsos dioses y otras supersticiones y ritos diabolicos en que vivian antiguamente los indios de las provincias de Huarocheri, Mama y Chaclla y hoy también viven engañados con gran perdicion de sus almas". In Arguedas (trans.), 2007, pp.191-213.

バーリン・ブレント、ポール・ケイ

2016 『基本の色彩語：普遍性と進化について』日高訳、叢書・ユニベルシタス 1041、法政大学出版局。(Berlin, Brent and Kay, Paul, *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. CSLI Publications, California.[1968,])。

Casaverde, J. Rojas

1970 "El mundo sobrenatural en una comunidad", *Allpanchis Phuturinqa*, 2:121-243.

Gonzalez Holguín, Diego

1989[1608] *Vocabulario de la lengua general de todo el Perú llamada lengua Quichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Lira, Jorge A.

1945 *Diccionario Quechuwa-Español*. Universidad Nacional de Tucman, Cusco.

大平秀一

2002 「エクアドルの病因観念『アイレ』の歴史性」『文明』。

2017 「序論 アンデス先住民社会の変化と継承性」『古代アメリカ』20 号、pp1-14。

Santo Thomas, Fray Domingo de

1560 *Lexicon, o vocabulario de la lengua generral del Perv, cõpuesto por el Maestro P. Domingo de S. Thmas de la orden de S.Domingo*. Francisco Fernandez de Cordoua, Impressor de la M.R., Valladorid.

Salomon, Frank and George L. Urioste (trasns.)

1991 *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*. University of Texas Press, Austin.

Taylor Gerald (ed. & trans.)

1987 *Ritos y tradiciones de Huarochirí: Manuscrito quechua de comienzos del siglo XVII, Versión paleográfica, interpretación fonológica y traducción al castellano*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

2008 *Ritos y tradiciones de Huarochirí. Instituto Franceés de Estudios Andinos UMIFRE 17 CNRS-MAEE*, Instituto de Estudios Peruanos, Fondo Editorial Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Urton, Gary

1981 *At the Crossroads of the Earth and the Sky: An Andean Cosmology*. University of Texas Press, Austin.

アンデスの楽器を科学する

山花 京子

東海大学文明研究所では、2017 年度に「コアプロジェクト3 東海大学所蔵文化財活用のための基盤整備（2017～2019 年度）（プロジェクトリーダー 山花京子）」発足させ、同研究所が所管している文化財に関して、収蔵環境の整備や保存修復と活用を行っている。

2018 年度夏より、アンデス・コレクションの修復保存のために、学内にあるマイクロナノ研究開発センター及びイメージング研究センターとの共同研究として、X 線 CT 装置（X-RAY(XT H225ST), Nikon 製,) や、走査型電子顕微鏡（SEM）（NeoScope JCM-6000Plus, JEOL 製）などを利用し、貴重な文化財を破壊することなく透視し、内部構造や顔料の成分組成を解明する試みが続けられている。

2018 年度末までに X 線 CT 装置で計測したアンデス・コレクションの遺物約 20 点のうち、パンパイプ（登録番号 9983 - 141）やトランベット（登録番号 11571 - 770）（本図録に写真を掲載している）など、明らかに楽器として作られたものがある一方、内部構造が非常に複雑で、容器に液体を入れて傾けると小鳥のさえずりや、犬の遠吠えのような音を発する、いわゆる「笛玉」を内蔵する土器があることもわかった。本稿では、修復保存という観点から、アンデス・コレクションのこれらの音が出る土製楽器を対象に、「アンデスの楽器を科学する」というサブ・プロジェクトを立ち上げ、文理融合の研究として大勢の研究者に協力を仰ぎながら研究を推進している（メンバー氏は文末参照）。

本稿では現在進行形で研究が続けられている、本学文明研究所蔵アンデス・コレクションのなかから、楽器として作られたパンパイプ（9983 - 141）と笛玉が内蔵された「男性彩画把手付双胴壺（9983 - 173）」の 2 点について研究の一端を紹介したい。

まず、パンパイプは、試験管のような一端が閉じた管を横一列、あるいは二列に複数本ならべて構成されている楽器で、同様の構造を持つ楽器は世界中に分布している。初現は古代ギリシアとされており、パンパイプの名の由来ともなった牧神パーンがこの楽器を吹く図像や神話が残されている。旧大陸のパンパイプと新大陸のものは構造上殆ど差異がないが、地理的にも歴史的にも隔たりがあるため、これらのつながりは不明である。パンパイプは、横に並べた管の開口部に直接息を吹き込み音を出すもので、基本的に一管一音だが、息を吹き込む強度や角度などによって倍音や半音などを出すことも可能である。

アンデスのパンパイプ（ケチュア語ではアンタラと呼ばれる。本図録では以降、アンタラと表記する）は、特に海岸部から多く出土しており、ナスカ文化の中心地的な祭祀センター、カワチ遺跡の祭祀遺構に伴って出土した大量のアンタラは、音を出す楽器が儀礼には欠かせない存在であったことを示している。



写真 1 パンパイプ（アンタラ）（9983 - 141）微かに湾曲している

本学文明研究所蔵のアンタラ（9983 - 141）は、12 管が横に並んだ構造をしているが、吹き口部分は少し弧を描いている。現代アンデス地方で使用されているサンポーニャ（多列笛のスペイン語名）には、奏者が吹き易いように吹き口が弧を描いているものがあるが、本学所蔵資料は現代のものほど湾曲してはいない（写真 1）。一番短い管から 6 本目（管中央部分まで）の表面は赤褐色で彩色されており、もう一方の長い管側は黒色である。12 管は長さ順に並んではいるが、一番短い管の長さを 1 とした場合、1 : 1.03 : 1.07 : 1.25 : 1.32 : 1.43 : 1.96 : 2.17 : 2.28 : 2.61 : 3.25 : 3.96 の比率となる。つまり、一番短い管とその横の 2 番目の管や 3 番目の管は長さがあまり変わらないのに対し、6 番目の管から急に長くなっていることがわかる。この比率は、一見規則性がないように見えるのだが、アンタラは対にして演奏された可能性も指摘されており、単体での音階の規則性を越えた音の世界を考察する必要があるのかもしれない。

それでは、この資料を X 線 CT 画像で見てみる（写真 2）。X 線 CT 画像では、非破壊で測定対象物の内部構造を知ることができるため、考古学分野において画期的な分析方法といえよう。画像（写真 3）によると、本資料はあらかじめ粘土で作っておいた管部分を並べ、筏状になった筒を粘土で連結し、羽根の部分をつけている。管を並べ、その周囲を粘土板で包み、羽根を足す作り方はナスカ中期以降のアンタラには共通するようだ（Bolaños, 1988）。

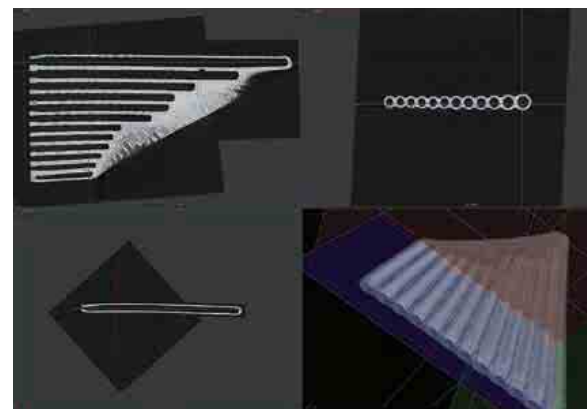


写真 2 パンパイプ（アンタラ）（9983 - 141）の X 線 CT 画像

この画像より、いくつか興味深い構造がみとれる。1）管の連結部には、1mm ほどの隙間が空いている。これは偶然の隙間ではないかと考えていたが、グルスツィンスカ・ツィオルコウスカ（Gluszczyńska-Ziółkowska, A., ）によると、同形のナスカのアンタラには本資料と同様に僅かな隙間があり、この隙間は管の共振のための意図的な空間であるという（ibid., 2009, 222）。2）管の横断面は円である一方、吹き口にあたる開口部分は、外から見ると楕円形をしている。開口部分のみ、管が先窄まりに成形されているのである。管には粘土板を環状に成形した際にできる継ぎ目はどこにもなく、管の厚みも一定である。つまり、管は開口部分から底まで一体成形で継ぎ目がない。これは、先窄まりの形の芯を有機材料（焼成後に残らない材料）で作り、その上に粘土を付けて一定の厚さに仕上げ、乾燥、焼成したのではないと思われる。3）羽の部分には、補修痕が 2 か所あるが、そのうち 1 か所は胎土の質がアンタラの素材と同じであるのに対し、他方の胎土はまったく違う密度を示している。グルスツィンスカ・ツィオルコウスカの見解では、アンタラは儀礼後に意図的に壊され、音楽を二度と奏することがないような形で埋められたという（ibid., 2009, 228）。同じ質の胎土を使って補修した箇所は、アンタラが使われていたナスカ時代の補修であると考えら



写真3 管の開口部とその断面画像

れるが、素材が違う粘土を使った補修については、後世のものと判断してよいだろう。

次に、男性彩画把手付双胴壺（9983 - 173）のX線CT画像（写真4）を見てみる。本資料はワリ文化期の遺物である。外見上は比較的シンプルな作りで、二つの壺が底部で筒状の部分で連結されており、湾曲した橋型の把手が上部に付いている。一方の壺には冠を被った男性が表現されており、頭頂部冠部分に4か所、両耳、口、喉部分にそれぞれ

孔が開いている。X線CT画像では、胴部器壁に継ぎ目の無い、典型的な「叩き」技法で制作された壺で、我々が測定した他の橋型壺同様、胴部に穴を開けた後に注口を差し込んでいる。本資料で興味深いのは、男性頭部内側に確認できた球の構造体である。これは、一般に「笛球」（ふえだま）と呼ばれるもので、この球体には一か所だけ穴が空いている。これを壺内の空気の通り道に適切な角度で固定することによって、笛球に入る際の空気が振動して音を発するのである。音の大きさや高低は笛球の大きさにより左右されると思われる。現在までに我々のプロジェクトチームが計測した資料の中で最も笛球が大きいものがピクス、次にワリ、そしてレクワイ文化期のものである。笛玉が土器のどこに置かれるかは、それぞれの文化によって特徴があるようだが、概して注口の付け根部分に付けられており、外からの笛球の存在が確認できるタイプと、全く目視確認ができない場合がある。

笛球の付いた土器は、その中に酒などの液体物を入れ、音を出すことを意図して作られている。神聖な酒と音が結びついている非常に特殊な土器といえよう。



写真4 左：男性彩画把手付双胴壺（9983 - 173） 右：同壺のCT画像データをもとに起こしたSTLデータ（株 アビスト提供）

以上はX線CT画像の研究から得られた結果であるが、「アンデスの土器を科学する」研究は画像解析にとどまらない。現在までの研究では、上記のアンタラについて、理論的に音を計算し、推定

音階を割り出している。理学部物理学科嘉多研究室では、共鳴周波数を2つの計算式によって解析し、アンタラの管の短い方（音高の高い方）からシ(B)・ラ(A)・ラ(A)・ソ(G)・ソ(G)・ファ(F)・レ(D)・ド(C)・シ(B)・ソ(G)・ミ(E)・レ(D)と音程予測している。

今後の研究では、上記の計算方法を用いて、男性彩画把手付双胴壺（9983 - 173）や、トランペットなどの楽器の音の推定を行う予定である。同時に、X線CT画像の画像データより得られる情報をもとに、3Dプリンターにて同寸のクリアモデルを作成し、空気の流れと音の関係を調査するための風洞実験を企画している。

今回は音の出るアンデス土器についての研究の一端を紹介したが、古代エジプトのパピルス修復保存研究や、硫黄製ビーズネックレスの復元研究、ファイアンスの復元研究など、実に多くの研究が本学所蔵の文化財を基軸に派生している。

大学所蔵の文化財は、保存修復分野の研究に役立つだけでなく、様々な専門家が多角的視野に立って遺物を検証することで、多くの新しい発見がある。今後の研究の更なる広がりも大いに期待したい。

3D スキャナとプリンタ によって原寸大に複製された楽器の音色は、以下のQRコードから聞くことができる。

9983 - 141 多列笛（アンタラ）



11571 - 770 トランペット



本研究のメンバー

槌谷和義・喜多理王・粟野若枝・佐々木海渡（MNTC（マイクロ・ナノ研究開発センター））・秋山泰伸 工学部応用化学学科・横山知則 工学研究科修士2年（2018年度時点）・岩井雄一朗 工学部材料科学学科3年生・大内信之助 理学部物理学科3年生・小能治子 文学部アジア文明学科3年（学生の学年は2018年度時点のもの）・山花京子 文化社会学部アジア学科

協力：（株）アビスト



「アンデスの失われた技術に挑む」東海大学新聞記事も参照されたい

注

※1 Bolaños, C., *Los Antaras Nazca*, Lima, 1988

※2 'Las Antaras y la musica,' Giuseppe Orefici, et. al., *Nasca, El desierto de los dioses de Cahuachi*, 2009, Graph Ediciones, Lima. pp. 213-231

※3 2018年12月21日マイクロ・ナノ研究開発センター成果報告会発表 山花京子他「アンデスの土器を科学する」



図録編

コプトの織物

古代エジプト最期の王朝プトレマイオス時代が紀元前 30 年にクレオパトラ 7 世の自死によって幕を閉じた後、エジプトはローマ帝国の属領となった。ローマ帝国はエジプト古来の神々の信仰を保護するどころか、反体制勢力の温床となる神殿の弾圧に乗り出した。そんな中、紀元後 1 世紀頃に聖マルコがアレクサンドリアにてキリスト教の教義を伝道し、隠遁生活を行いながら教義を極めようとする修道僧や町の教場（教会）の数は急激に増加していった。以来、エジプトにおけるキリスト教は、ローマ帝国が東西に分裂（紀元後 395 年）し、イスラーム勢力下におかれる（紀元後 640 年）まで興隆した。コプトとは、一般的にキリスト教を受け入れたエジプト人のことを指す。

このように政治や宗教体系が大きく変化したエジプトでは、王朝時代から守られてきた美術様式や規範が少しずつ変化していき、独特のキリスト教様式へと発展していった。この初期キリスト教時代をコプト時代と呼び、顕著な美術様式に代表される文化をコプト文化と呼んでいる。エジプトにおいては、イスラーム勢力の支配下においても文化の変化は緩やかであったため、エジプトにおけるコプト時代、およびコプト文化とは、ローマ属領時代から 12 世紀頃までのイスラーム時代の間の相対的な文化期を指し示す呼称である。

コプトの人々は古来の美術様式を簡略化させて独自の「コプト美術」様式を作り出した。ヘラクレスやアテナといったギリシア・ローマの神々の描写は聖人の姿や聖象徴物にとってかわり、蔓草文様は複雑に絡み合い組紐十字架文などに発展し（登録番号 SK406）北方に伝播しケルト十字に大きな影響を与えたともいわれている。

さて、コプト美術でもっとも世界に知られているものが「コプト織」という特徴的な織で作られたタペストリーや長衣、上着、クッションカバー、ポシェット、帽子などである。初期キリスト教徒の墓から出土することが多く、屍衣として身に付けていた着衣や副葬品が宝探的な蒐集によって古物商に流れ、それらを世界の博物館・美術館が購入し、出土地や出土状況などの体系的な記録がないものが多いため、コプト織の編年作業を一層困難なものにしている。これまでの研究により、コプト織の編年は織柄と色のバリエーションで大まかに紀元後 3 世紀～11 世紀頃の間位置づけられているが、年代決定の根拠や推定は研究者により相違があるのが現状である。

コプト織は、亜麻布に色つきの羊毛で織柄を表現したものが始まりで、初期の織物は白地に紫色の幾何学文様が施されているもの（登録番号 SK405）が多かったが、徐々に

縦糸と緯糸ともに羊毛を使うようになり赤、黄、緑、黒、白の多色系による鮮やかな織物へと発展した。横糸を「つづれ」に織り込むことによって複雑な文様が織り出されるようになった。また、亜麻と羊毛の平織りの上に刺繍を施す技法や立体ループ編み（登録番号 SK417）など、時代を経るにつれさまざまな技法が発達した。

コプト織物は、日本においては「コプト裂（ぎれ）」と呼ばれることが多いが、これは、例えばチュニックなどの織物製品全体を指している言葉ではなく、文様のある部分のみが蒐集されているからである。コプト裂は古裂蒐集愛好者の多い日本では人気が高い裂である。しかし、このような断片的な文様部分だけでは、織物全体の中でこれらの文様がどのように付けられていたのか、不明なことが多い。

本学の AENET コレクションには 52 点のコプト織断片が収蔵されており、それらはほとんどチュニックの装飾だったと考えられる。チュニックは 1 枚の布を半分に折り、折り目の部分に首を出すための切れ目を入れ、両脇にあたる部分を縫い、長袖を付けただけの簡単な作りの長衣である。当時のチュニックと文様帯の模式図を図 1 に示した。

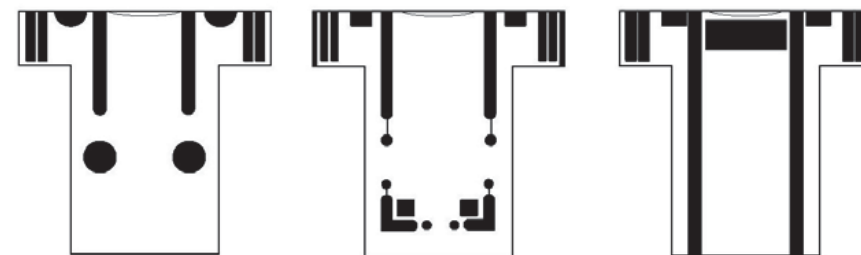


図 1 チュニックの文様帯の模式図 3 タイプ

注

※ 1 「コプト」とはギリシア人がエジプト人を指す「アイギュプトス」がコプト語の「キプティアノス」と表記されるようになり、それがさらにアラビア語の「ギプティ」となり「コプト」へと転訛した。

001



001	
遺物名称	果実文型
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	44.0 × 31.0 cm
時代/文化期	ビザンツ～イスラーム時代 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 5 - 7 世紀
収蔵品番号	SK223

経糸と横糸は基本的に亜麻糸だが、色部分については羊毛が使用されている。SK414 と同じ綴れ織りの技法を使用している。籠または鉢に入った果実（おそらくザクロ）の表現は、古来より豊穡のシンボルとみなされている。

002	
遺物名称	連続文型
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	97.0 × 23.0 cm
時代/文化期	ビザンツ～イスラーム時代 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 5 - 7 世紀
収蔵品番号	SK395

チュニクの右前身ごろに縦に走る装飾帯である。赤いタッセルは、チュニクの首の端の部分に付けられた房飾りと考えられる。反対側のチュニク裾部分には四角に囲った中に2人の人物が綴れ織で表現されている。糸には、経糸に自然色の亜麻、そして文様部分の横糸には紫色の羊毛が使われている。意匠化された蔓草文の中には動物や人物が同じく綴れ織で表現されている。

003	
遺物名称	連続組紐文型
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	24.5 × 20.5 cm
時代/文化期	ビザンツ期 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 4 - 5 世紀
収蔵品番号	SK406

経糸と横糸には亜麻糸を用いるが、色のついている部分は羊毛である。亜麻は古代の染色技術では染められないため、羊毛に色を付けて織り込んだ。連続組紐の文様は邪視除けの意匠として古代においては公職に就く者が着用していたようだ。この連続する組紐文はキリスト教の広がりとともに、北方にも伝わり、ケルトの意匠にも影響を及ぼしたと言われている。

004	
遺物名称	蔓草文型
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	22.5 × 20.2 cm
時代/文化期	イスラーム時代 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 8 - 10 世紀
収蔵品番号	SK409

チュニクの袖部分と考えられる。経糸は亜麻糸、横糸は亜麻糸と羊毛（色付部分）である。ブドウ蔓草文が簡略化された意匠が織り込まれている。

005	
遺物名称	花文型
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	11.5 × 11.0 cm
時代/文化期	ビザンツ期 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 4 - 6 世紀
収蔵品番号	SK414

花文は巻きつけ刺繍で作られている。マンドレイクの花を表現したものか。本来はチュニクの裾部分近くに対になっていた。現在の地布と花文は別のものと思われる。

006	
遺物名称	葉状文綴裂
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	19.5 × 9.5 cm
時代/文化期	ビザンツ期 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 3 - 5 世紀
収蔵品番号	SK415

羊毛地に帝王紫（貝由来の染料）を使って葉状文をつづれ織りで表現し、織糸の境目部分を白い毛糸で繕っている。帝王紫の使用と、つづれ織りの境目を繕う技法は紀元後3～5世紀頃まで使われたと考えられている。

004



005



006



002



003



007



008



009



007	
遺物名称	タビ 織絹綳裂
材質	絹
寸法	10.0 × 17.0 cm
時代 / 文化期	イスラム時代 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 10 - 12 世紀頃
収蔵品番号	SK413-2

エジプトのティラズ (Tiraz) の工房で織られたと考えられている。タビー織り地につづれ織りで文様を施している。使用されている糸は絹と考えられ、当時の織物工芸の水準の高さを感じられる。このような絹織物はコプト時代の文様を残しながらも、イスラム時代への変容を感じさせる柄が多いため、「コプトーイスラム様式」と呼ばれている。

008	
遺物名称	ルーブ織人面裂
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	9.5 × 10.5 cm
時代 / 文化期	ビザンツ期 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 4 - 6 世紀
収蔵品番号	SK417

ルーブ織という技法を使い、横糸を表面に輪状に残し、織物を立体的に見せる工夫をしている。このような人面は、王朝時代のミイラマスクの名残を残しており、紀元後 1 - 2 世紀頃にはミイラの顔面の上にはビーズで作られたマスクが載せられていた。織物での代用はビーズ製のミイラマスクに続く時代のものと考えられる。

009	
遺物名称	広襟飾裂
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	25.5 × 14.0 cm
時代 / 文化期	ビザンツ - イスラム時代 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 8-10 世紀 ?
収蔵品番号	SK419

チュニクの襟の飾りと思われる。標準的なチュニクの襟ぐりは、首が出る部分を直線的に裁断しただけのものだが、本品は襟元を曲線的に割っており、珍しい。この襟ぐりから同心円状に広がる形は、古代エジプト王朝時代の「ウセク」という広襟飾りを想起させ、キリスト教が広まった後も伝統的服装の形が残っていたことを示している。

010	
遺物名称	十字付衣装袖部分
材質	羊毛・亜麻糸
寸法	26.7 × 14.8 cm
時代 / 文化期	ビザンツ期 (コプト文化期)
推定年代	紀元後 4 - 5 世紀
収蔵品番号	SK437

チュニクの袖部分と思われる。経糸、横糸ともに基本の亜麻糸が使用されているが紫の部分は羊毛である。羊毛で文様を織り込んだ後、上からかがり糸で細部が施されている。紫の染料は巻貝から少量取れる分泌物を使い、「皇帝紫」と呼ばれた。

011	
遺物名称	ファイアンス製指輪
材質	ファイアンス
寸法	2.2 × 0.2 cm 直径 1.1cm
時代 / 文化期	第 18 王朝時代 アクエンアテン治世 (アマルナ時代)
推定年代	紀元前 1351-1334 頃
収蔵品番号	SK302

王名や吉祥紋を記した指輪は第 18 王朝時代中ごろのアメンヘテプ 3 世の治世から大量に作られ始めた。アメンヘテプ 3 世と続くトウトアंकアメンの治世にも同様の指輪が量産され、おそらく家臣たちに下賜されたと思われる。本資料にはアクエンアテン王の名 (Akh-en-Aten) の銘がある。

012	
遺物名称	ファイアンス製指輪
材質	ファイアンス
寸法	2.2 × 2.1 cm 直径 1.4cm
時代 / 文化期	第 18 王朝時代 アクエンアテン治世 (アマルナ時代)
推定年代	紀元前 1351-1334 頃
収蔵品番号	SK303

緑青色の釉が施された指輪は特にアメンヘテプ 3 世後期とアクエンアテン王の治世に多く製作されている。このような指輪は別々に作られた印面とリングの輪の部分を接着した後に釉を施して焼成している。本資料にはアクエンアテン王の即位名 (Nefer-kheperu-Re Wa-en-Re) の銘がある。

010



011



012



013



013	
遺物名称	ミミズク型護符
材質	長石
寸法	1.1 × 0.7 cm 厚 0.3cm
時代 / 文化期	古王国時代～第一中間期
推定年代	紀元前 2682-1794 年頃
収蔵品番号	SK386

全体の形と足の削り出し方から古王国時代から第1中間期のものであると推測する。ミミズクは夜の闇の中で餌を見つける眼力と、首をあらゆる方向に回すことができるという他の鳥にはない特徴があるために古代エジプト人に畏れられた。

014



014	
遺物名称	魚型護符
材質	ラピスラズリ
寸法	1.5 × 0.5 cm 厚 0.3cm
時代 / 文化期	古王国時代～第一中間期
推定年代	紀元前 2500-2000 年頃
収蔵品番号	SK387

スキルベ・ミスタス (*Schilbe mystus*) (ギギ上科スキルベ科スキルベ属) 通称アフリカン・バターキャットフィッシュという。アフリカのナイル川やザンベジ川などの淡水に住むナマズの仲間である。この魚はジェデト(ギリシア語名メンデス)の聖魚とされた。ジェデトの町の守護神はバーネブジェデト(「オシリス神の魂」の意)で、その配偶神は魚の姿のフウトメヒト女神で、子供のハルボクラテス(子供のホルス神)とともに3柱神群を構成していた。本品はエジプトの貴石のなかでは最も高価なラピスラズリ製であるため、原石はアフガニスタンのバダクシャンから輸入されてきたものと思われる。この護符は、身につけた人にメンデスの神の加護があるよう祈ったものだと思われる。

015	
遺物名称	ハエ型護符
材質	凍石
寸法	1.4 × 1.0 cm 厚 0.3cm
時代 / 文化期	新王国時代～第3中間期
推定年代	紀元前 1550-1070 年頃
収蔵品番号	SK388

悪運や災害を予防する護符であるが、ハエは人間に纏わりついて離れないため、敵に纏わりついて倒す武勇の象徴ともみなされた。このようはハエ形の護符は新王国時代から第3中間期にかけて作られ、特に王からの下賜品として用いられたと思われる。

016	
遺物名称	耳形護符
材質	ファイアンス
寸法	3.1 × 1.4 cm 厚 0.5cm
時代 / 文化期	新王国時代～第3中間期
推定年代	紀元前 1550-667 年頃
収蔵品番号	SK389

耳形の護符を身につける習慣は新王国時代より以前には存在しなかったため、おそらくは外部地域からの文化的影響や外来の神の信仰からはじまったと考えられる。人々の嘆願の声を聞くことができるアメン、ホルス、トトやイシスといった神々に祈願が聞かれるのを願ったものであろう。

017	
遺物名称	バピルス柱形護符
材質	ファイアンス
寸法	6.4 × 1.6 cm 厚 1.5cm 直径 1.6cm
時代 / 文化期	末期王朝～プトレマイオス朝
推定年代	紀元前 664-30 年頃
収蔵品番号	SK390

神殿などに多用されたバピルスモチーフにした柱の形を表わしている。『死者の書』第159章によると、長石(緑色)のバピルス柱護符をミイラの喉に置けば、永遠の若い活力が保証された。

015



016



017



018



018	
遺物名称	ウジャト眼護符
材質	ファイアンス
寸法	1.8 × 0.5 cm 直径 1.4cm
時代 / 文化期	末期王朝～プトレマイオス朝
推定年代	紀元前 664-30 年
収蔵品番号	SK369
ウジャトはホルス神の眼を表し、完全な状態を象徴する聖眼である。傷を治癒し元通りに戻す働きがあるため、死者とともに副葬されることも多かった。『死者の書』167 章には、ミイラに装着するべきものと書かれている。	

019



019	
遺物名称	ウジャト眼護符
材質	ファイアンス
寸法	3.6 × 0.7 cm 直径 3.0cm
時代 / 文化期	第 3 中間期 ～プトレマイオス朝
推定年代	紀元前 1070-30 年
収蔵品番号	SK371
同前	

020



020	
遺物名称	ウジャト眼護符
材質	ファイアンス
寸法	3.6 × 3.0 cm 厚 0.7cm
時代 / 文化期	末期王朝～プトレマイオス朝
推定年代	紀元前 664-30 年
収蔵品番号	SK375
同前	

021	
遺物名称	ブドウ房型ビーズ
材質	ファイアンス
寸法	1.8 × 0.9 cm 厚 0.4cm
時代 / 文化期	新王国時代（第 18 王朝）
推定年代	紀元前 1550-1292 頃
収蔵品番号	SK392
ブドウ房形を象ったものは特に第 18 王朝に流行した。本資料は多産や豊穡を髣髴とさせ、さらに高級嗜好品であるワインと結びつく。	

021



022	
遺物名称	ベス神護符
材質	ファイアンス
寸法	2.6 cm
時代 / 文化期	ローマ時代
推定年代	紀元後 2 世紀頃
収蔵品番号	SK383b
ベス神は、元来西アジア地方の神であったが、次第に古代エジプト社会に定着し、古代エジプトの第 3 中間期（紀元前 1070 年頃 - 667 年）以降には家内安全や子宝の神として広く信仰を集めた神である。獠猛な顔が邪気を払うとみなされ、舌を出し、威嚇の表情をした顔が強調して描かれる。ベス神の図像は古王国時代末期に現れ、続く中王国時代には獣のような顔つきの人間として表現されていた。続く新王国時代（紀元前 1550 - 1070 年頃）以降は全身の表現が獣に着、ライオンのようなたてがみを持ち、口を開けて舌を出し、威嚇の表情をした矮人として表現されるようになる。ベス神の顔の表現は末期王朝時代からローマ属領時代初期（紀元前 664 年 - 紀元後 138 年頃）にかけて徐々に縦長から横長になり、たてがみの表現も変化する。その変化に伴い、ベス神の表情は獠猛な獣の表現が薄れ、頭髪を耳の辺りで外側に巻き、頬鬚と顎鬚を蓄えた男性のように表現される例が多くなる。	

022



023



023	
遺物名称	ファイアンス鉢
材質	ファイアンス
寸法	13.4 × 5.2 cm 厚 0.4cm 直径 13.4cm
時代/文化期	中王国時代～新王国時代初期
推定年代	紀元前 2055-1500 年頃
収蔵品番号	SK152
外側に幾何学文が描かれた薄手の鉢。新王国時代に流行した厚手の「ヌン碗」とは形状を異にするが、ヌン碗同様に祭礼や儀式の際に使われたものとする。	

024



024	
遺物名称	硫黄ビーズ製ネックレス
材質	硫黄
寸法	22.0 × 22.0 cm 厚 1.2cm 直径 22.0cm
時代/文化期	プトレマイオス～ローマ属領
推定年代	紀元前 304～紀元後 200 年頃
収蔵品番号	SK176
花形と牝牛頭のビーズを1連に繋いでいる。本コレクションにはもう1連あり（SK10）、おそらくは広襟のように多くのビーズをつなげた装飾品であったと思われる。ビーズは硫黄を溶かし、鋳型に注ぎ込んで作成した。	

025



025	
遺物名称	ラスター彩陶器
材質	陶土
寸法	8.5 × 7.2 cm 厚 3.9 cm 直径 8.5cm
時代/文化期	イスラーム時代
推定年代	紀元後 11 - 12 世紀
収蔵品番号	SK042-00-007
エジプトのイスラーム陶器を代表する一つであるラスター彩陶器は、鉛を使った白濁釉を施した器に金属を含む顔料で絵付けをして焼き付けたものである。この技法は8世紀後半のエジプトのガラス装飾技法が転用されたといわれる。ラスター彩陶器は、イラク、イランが発祥の地といわれるが、その後、職人と技術がエジプトへ流入したことで、10～12世紀のファーティマ朝時代がエジプトにおけるラスター彩陶器製作の最盛期であった。白抜きで表現されているウサギや魚は生き生きと描かれており、今にも動きそうである。	

026	
遺物名称	ラスター彩陶器
材質	陶土
寸法	8.5 × 7.2 cm 厚 3.9 cm 直径 7.2cm
時代/文化期	イスラーム時代
推定年代	紀元前 11 - 12 世紀頃
収蔵品番号	SK42-16
同前	



026

027	
遺物名称	ラスター彩陶器
材質	陶土
寸法	2.5 × 6.0 cm 直径 3.9cm
時代/文化期	イスラーム時代
推定年代	紀元後 10 - 11 世紀頃
収蔵品番号	SK82-10
同前	



027

028	
遺物名称	赤色研磨黒頂土器
材質	粘土
寸法	20.4 cm 直径 12.4 cm
時代/文化期	先王朝時代
推定年代	紀元前 3900-3700 年頃
収蔵品番号	SK006-001
ナカーダⅠc～ⅠⅡa期の土器で、鉄分を多く含む土を使って手捏ね成形し、磨きをかけて焼成した。焼成最終段階に口縁の部分を熱い灰の中に入れると、還元反応のために黒色に変化する。赤褐色と黒のコントラストを持つこのタイプの土器は先王朝時代独特である。	



028

029



029	
遺物名称	キプロス土器
材質	粘土
寸法	13.0 cm 直径 8.3cm
時代 / 文化期	新王国時代前半
推定年代	紀元前 1550 - 1292 年頃
収蔵品番号	SK006-005
同心円状の文様を施したフラスコはキプロス産で、エジプトには交易によってもたらされたと考えられている。	

030



030	
遺物名称	木棺部分（手）
材質	アカシア？黒檀？
寸法	20.0 × 13.5cm 厚 4.5cm
時代 / 文化期	新王国時代初期 ～第三中間期初期
推定年代	紀元前 1550-945 年頃
収蔵品番号	SK186
人型棺の上蓋の表面で組んだ両手のうち右手である。イシス女神の結び目ティト護符を持つ。左手はオシリス神のジェド柱を持っていたはずである。『死者の書』第 156 章には、イシス女神の血の色の護符（赤色碧玉）を置くよう述べられている。	

031	
遺物名称	紅玉髓指輪
材質	紅玉髓
寸法	2.4 × 2.3 cm 厚 1.2 cm 直径 2.2cm
時代 / 文化期	ローマ時代
推定年代	紀元前 31- 紀元後 395 年
収蔵品番号	SK111-01
紅玉髓製の指輪で、丸彫りしてある。肩の部分が張り出しており、径が小さいことから、子供あるいは指の細い女性用かと思われる。	

032	
遺物名称	棍棒頭
材質	斑岩様閃緑岩
寸法	
時代 / 文化期	先王朝時代
推定年代	紀元前 3900-3700 年頃
収蔵品番号	SK119-001 ~ 003
先王朝時代ナカーダⅠ期の特徴を持つ、刃部の鋭利な円盤形棍棒頭で、柄孔部を頂として円錐形の断面をもつ。硬くて重い閃緑岩は斑岩とともに円盤形棍棒頭材に最も多く用いられた。小さいものは実用品というよりは副葬品ではないかと思われる。	

033	
遺物名称	カノボス容器蓋
材質	粘土・漚青
寸法	9.4 × 11.0cm
時代 / 文化期	新王国時代～末期王朝時代
推定年代	紀元前 1550-667 年
収蔵品番号	SK198
ミイラづくりの際に死者の内臓を保管する容器で、人頭のイムセティ神を表現している。カノボス容器は 4 つあり、「ホルスの 4 人の息子たち」という神々がそれぞれの臓器を入れた壺を守護していた。この遺物は、頭部全体に真っ黒い漚青が塗布されている。黒色はエジプト人の色彩象徴ではオシリス神の再生・復活を意味した。副葬品の像にはしばしばこの例のように真っ黒に処置したものが見られる。	

031



032



033



034



034	
遺物名称	凍石製指輪
材質	凍石
寸法	1.3 × 1.4 cm 直径 2.4cm
時代 / 文化期	新王国時代
推定年代	紀元前 1550-1070 年頃
収蔵品番号	SK304

満月と三日月を乗せた船の装飾がある。月は知恵の神トトの象徴でもあるが、ホルス神の左目（ウジャト眼）が天空に投げ上げられた際に月になったという神話もある。

035



035	
遺物名称	モザイクガラス素材
材質	ガラス
寸法	2.0 × 0.7 cm 直径 1.8cm
時代 / 文化期	プトレマイオス朝時代
推定年代	紀元前 304 - 30 年
収蔵品番号	SK347

組み合わせた色ガラス棒を溶着させ引き伸ばし、金太郎飴の要領で切ってモザイクガラスのパーツを作った。ウジャト眼の未完成品である。本来はもっと細く引き伸ばして吉祥文様の装飾モザイクとなる。

036	
遺物名称	死者の書 断片
材質	パピルス
寸法	2.6 × 3.0 cm
時代 / 文化期	新王国時代～第 3 中間期
推定年代	紀元前 1550 頃 -667 年
収蔵品番号	SK116-002a-014

死者の書の挿絵の一場面で、被葬者（小さく描かれている）が神に手を引かれて場面左側へ進み出る様子が表わされている。場面左側には、死者の魂を審判する場面が描かれていたと思われる。

037	
遺物名称	パピルス
材質	パピルス
寸法	11.0 × 10.0 cm 厚 0.7cm
時代 / 文化期	プトレマイオス朝時代
推定年代	紀元前 304-30 年
収蔵品番号	SK116-020-1v

パピルス文書は後の時代に再利用され、動物ミイラを作る際に使われた。ミイラに泥や布、パピルス断片などを貼りつけてミイラの外側表面を作る技法をカルトナージュという。

038	
遺物名称	死者の書 断片
材質	パピルス
寸法	7.6 × 19.0 cm
時代 / 文化期	プトレマイオス朝時代
推定年代	紀元前 304-30 年
収蔵品番号	SK116-005

「死者の書」の一部で、死者の心臓が審判にかけられあの世に入る資格があるか否かを審議される場面に並ぶ神々を描いていると考えられる。

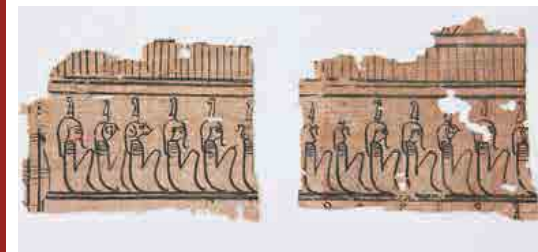
036



037



038



039



040



041



資料保存のため、展示入れ替えを行う場合があります。
図録掲載遺物と展示室の出陳遺物が異なる可能性もありますので、ご理解いただけますようお願いいたします。

039	
遺物名称	縞文多彩角皿
材質	土製
寸法	19.6 × 20.6 cm
時代 / 文化期	前期中間期 ?
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-1057

アンデスにおいて地下世界（ウフ・パチャ）は、山の神々の領域である。そこは、闇・暗黒の世界でありながら、輝きそして多彩なる世界でもある。この遺物には、061 の旗と同様に、その多彩性が直接的に示されている。多彩なる様態は、ケチュア語で「パウカル」と称される。この皿には使用痕がなく、祭祀時に旗のように掲げられた可能性がある。

040	
遺物名称	死者動物表象多彩角皿
材質	土製
寸法	36.0 × 36.0 cm
時代 / 文化期	前期中間期 ?
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-1059

供物として捧げられた者であれ、自然死した者であれ、生きとし生ける者すべては死後に山に向かい、山の神々の世界の一部となる。この遺物には、多彩性をもつその世界が表象されている。039 と同様、極めて珍しい遺物だが、リマ市のエンリコ・ポリ博物館所蔵品に類例が認められる。

041	
遺物名称	幾何学文平・羅織裂
材質	木綿
寸法	43.0 × 41.0 cm
時代 / 文化期	チャンカイ
推定年代	12 - 15 世紀
収蔵品番号	9983-303

17 世紀に先住民が描いた図像そして現在の民族誌をみると、山の神々をめぐる祭祀・儀礼において、女性たちは手に 40cm 四方程度の布を手にし、列をなして踊る。その布は三角状に二つに折られ、両手で持たれる。多彩性を伴うこのほぼ正方形の織物は、同じように用いられた可能性がある。

042	
遺物名称	神の表象平織裂
材質	木綿
寸法	31.5 × 60.5 cm
時代 / 文化期	チャビン
推定年代	12 - 15 世紀
収蔵品番号	9983-216

山の神々は、様々な動物で表象される。ピューマ、猛禽類、トカゲ、ハチドリ、ヘビ等、実に多様である。形成期のモチーフでは、牙や爪等が強調され、複雑に組み合わせられる。多くの場合、示された眼・瞳は上方を向いている。神々の領域（地下世界）から、生きとし生ける者のいる地上世界を見上げていると解釈することが可能である。

043	
遺物名称	ハヤブサ象形壺
材質	土製
寸法	17.5 × 22.1 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-658

現代の民族誌によれば、シャーマンに呼ばれたとき、山の神々はハヤブサの姿で現れるという。このハヤブサは、ふくよかに象形されているように思われる。供物・人間を受け取って満腹となり、満足している山の神が表象されたのであろう。

044	
遺物名称	コンドル彩画鉢
材質	土製
寸法	9.4 × 14.0 cm
時代 / 文化期	ワリ
推定年代	8 - 11 世紀
収蔵品番号	9983-170

嘴の特徴より、描かれた鳥はコンドルと判断できる。先住民の語りによれば、コンドルは山の神の泉で水浴びをして若返るため、自然死することはないという。コンドルは、山の神そのもの、あるいはその使者・家禽と捉えられている。「アンカス」（青色）は、山の神々と密接な関係をもつ。この語と語根を共有する「アンカ」は、猛禽類を指す。



042



043



044





045



046



047



045	
遺物名称	祭祀表象刺繍平織型
材質	木綿・獣毛
寸法	46.5 x 28.0 cm
時代/文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-1085

この織物には、祭祀の場面・要素が表象されている。多彩性が強調された男性は、帯が後方に垂れる頭飾りを付し、腰にも帯状装身具を纏い、手には投石紐や杖状の道具を持っている。また周囲には、アンタラ（多列笛）、骨製のケーナ、そして複数の投石紐が示されている。アンデスにおいて、杖（パラ）は、力の象徴であり、責任ある立場の者や神々が手にする。

046	
遺物名称	多列笛（アンタラ）
材質	土製
寸法	35.9 x 2.1 cm 奥行 17.4cm
時代/文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	9983-141

土製のアンタラは、ナスカやパラカス等、ペルー中央～南海岸部で多く出土している。タブラーダ・デ・ルリン遺跡からは、男性の墓に限り、2つのアンタラが被葬者の頭部両脇に副葬されている。アンデスのみならず、ラテンアメリカ全域において、気鳴楽器は男性のみによって使用される。

047	
遺物名称	トランペット
材質	土製
寸法	42.5 cm
時代/文化期	レクワイ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-770

現在のアンデスの祭祀では、地元の楽団（バンダ）が欠かせない。トランペットやサクソフォン等の金管楽器は必需品でもある。これらはすべてヨーロッパからもたらされたと考えられがちだが、トランペットはインカ以前から製作・使用されていた。土製と金属製のものが出土している。

048	
遺物名称	幾何学文綴織帯状装身具
材質	獣毛
寸法	432.0 x 4.0 cm
時代/文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	9983-250

帯状の織物の出土例は多い。「帯」という名称より、何かに巻き付けて使用されたイメージを伴う。しかしそれらの中には、祭祀の踊りで、帽子・頭飾り・頭部から後方に垂れ下げて使用された装身具が多く含まれているはずである。それはおそらく「チュンブルコ」と呼ばれていたと思われる。

049	
遺物名称	投石紐（オンダ）
材質	獣毛
寸法	140.0 cm
時代/文化期	インカ？
推定年代	15 世紀 -1533 年
収蔵品番号	9983-408

先住民の語りによれば、投石紐あるいは石を両端に付した紐（ボーク、アイリョ、リウイ）は、山の神々の要素でもある。シャーマンが呼ぶと、山の神々はまず鞭打ち、痛み・試験に耐えられるかどうか試すという。山の神々をめぐる現代の祭祀では、鞭が手にされ、実際に人を鞭打つ。それらの鞭には、金属が嵌め込まれている。049の投石紐は、同様の特徴を呈している。

050	
遺物名称	投石紐（オンダ）
材質	獣毛
寸法	330.0 x 3.0 cm
時代/文化期	インカ？
推定年代	15 世紀 -1533 年
収蔵品番号	11571-1246

「投石紐」という名称により、石の投てきのためだけの道具と印象付けられてしまう。しかし民族誌を見ると、これらの投石紐は、祭祀・儀礼において、鞭として使用されるケースが多く認められる。



048



049



050



051



051	
遺物名称	シャーマン表象単注口壺
材質	土製
寸法	18.9 × 13.0 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	9983-134

ナスカ文化では、地中に穴を開け、1カ所に3～40個程度の首級が埋納された。頭部内には農作物や織物等が詰め込まれ、唇にはトゲ（ワランゴの木）が刺され、額には紐でぶら下げるための穴が開けられる。これらは祭祀・儀礼でも用いられ、それを「ワヨ」と呼んだ社会もある。この土器には、首級を手にする人物が表象されている。

052



052	
遺物名称	山の神表象双注口壺
材質	土製
寸法	17.3 × 15.2 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-640

先住民の語りや神々の名称を調べると、山の神々は、人間の血を飲んだり、食べたりすることが大好きな存在である。その見返りとして豊穡や繁殖をもたらす。おそらく山の神々を表象したと思われるナスカ文化の様式化された神の表象は、多くの場合、供物として贈られた人間の頭部と共に示され、時に体から農作物が生え出ている。

053



053	
遺物名称	山の神表象双注口壺
材質	土製
寸法	16.6 × 12.4 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-633

ナスカ文化の神は、常に頭飾り・鼻飾りを付している。これらは実際に出土しており、大半が金製である。ナスカの土器のモチーフは、様式化がその特徴の一つとされる。しかし、054と比較すると、頭飾りは写実性を帯びている。ただしその色は、黄色ではなく白系が用いられている。おそらく輝きが意識されていると思われる。

054	
遺物名称	金製頭飾り
材質	金製
寸法	15.1 × 18.1 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-869

053に示されている頭飾りと同質の特徴を呈している。4つの小さな穴の位置から、053の表象と同様、頭飾りとして用いられたことが容易に推測できる。アンデスにおいて、金をはじめとする鉱物は、山の神々の所有物と考えられている。

055	
遺物名称	首級・神官表象裂
材質	獣毛
寸法	71.0 × 63.0 cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	11571-1128

表象された人物の頭部には、054と同質の頭飾りが付けられている。手にしているのは、装飾が施された杖（バラ）が様式化されたものである。山の神々は、時に人間とまったく同じ姿を取り、知らぬ間に祭祀に来ていることもあるという。このモチーフは、山の神あるいはその姿を模したシャーマン・踊り手が表象されている。

056	
遺物名称	死者表象綴織裂
材質	獣毛
寸法	29.5 × 13.0 cm
時代 / 文化期	チャンカイ
推定年代	12 - 15 世紀
収蔵品番号	9983-332

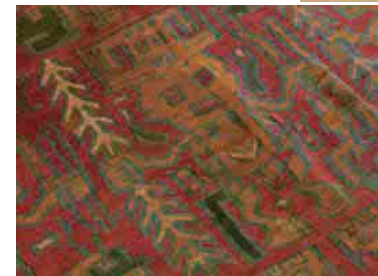
盛装した人間が、多彩性を強く意識して示されている。ただし顔はみな灰色で、生気がない。おそらく多彩なる山の神々の世界にいる死者が示されている。よくみると、衣服・頭飾りは2種にすぎない。盛装を考慮に入れると、山の神々に捧げられた若い男女が表象されている可能性がある。



054



055



056



057



058



059



057	
遺物名称	死者表象縁飾り
材質	獣毛
寸法	7.6 × 60.0 cm
時代 / 文化期	パラカス末期～ナスカ
推定年代	B.C.3 - A.D.3 世紀頃
収蔵品番号	11571-1046

死者を表象したこの種の縁飾りは、パラカス後期～ナスカ初期のマント・織物の縁に付けられている。それらのマントには、黒色あるいは濃紺色のものが多い。同質の織物には、花、鳥、死者、山の神々などが、刺繍で極めて多彩に示される。おそらくこの種の縁飾りは、山の神々の世界にいる無数の死者たちが意識されている。

058	
遺物名称	山の神の世界表象裂
材質	獣毛
寸法	38.5 × 24.5 cm
時代 / 文化期	ワリ・チムー
推定年代	8 - 10 世紀
収蔵品番号	11571-1194

黒色を下地に多彩なる存在が示されている。おそらく山の神々の世界・死者の世界のイメージが表象されたものであろう。上方に示されている顔は、ティアワナコの太陽の門やワリ文化の土器に示される図像と酷似している。

059	
遺物名称	山の神表象羽毛付平織貴頭衣
材質	木綿
寸法	1.8 × 0.9cm 厚 0.4cm
時代 / 文化期	ナスカ
推定年代	1 - 8 世紀
収蔵品番号	9983-261

山の神々の領域には、多彩なる鳥の存在そして多彩なる羽毛に満ち溢れた状態が意識されている。それらは輝くものとしてもイメージされている。羽毛を施した貴頭衣の装飾で、星形の中に顔を描くモチーフの事例は、複数知られている。おそらく、光輝く山の神々が意識されているのであろう。

060	
遺物名称	死者鳥文綴織貴頭衣
材質	木綿
寸法	50.0 × 75.0 cm
時代 / 文化期	チャンカイ
推定年代	12 - 15 世紀
収蔵品番号	9983-404

これは、子供用の貴頭衣である。示されたモチーフは、おそらく山の神々・死者の世界において、鳥と化しているたくさんの子供たちがイメージされているように思われる。この貴頭衣が犠牲として旅立った子供に副葬されていたものと仮定すれば、旅立たせる子を思いながら、生前に母親が織ったものと解釈することも可能である。インカの事例では、山に捧げられた若年者は、幼少時の髪切り儀礼（ルトチコ）で切った髪、自身の乳歯等を携えており、明らかに親が入念なる準備をして旅立たせている。

061	
遺物名称	縞文平織旗
材質	木綿
寸法	34.0 × 120.0 cm
時代 / 文化期	チャンカイ？
推定年代	12 - 15 世紀
収蔵品番号	9983-368

山の神々をめぐる現在の祭祀・儀礼では、棒（ポール）を差し込んだ多彩色の旗がゆっくりと振られる。その旗は、多彩な縞文様を呈するものが多い。この木綿製織物（軽量）の短辺の一端は、棒（ポール）が差し込めるようになっており、そのエッジ部分には刺繍が施されている。よって現在と同様に、祭祀・儀礼に用いられた旗と考えることが可能である。旗はケチュア語で「ウナンチャ」と称された。この織物は、インカ以前の旗と同等し得る稀有な事例の一つで、極めて貴重な資料である。



060



061



謝辞

東海大学 11 号館図書館展示室における文明研究所と付属図書館の主催企画「古代エジプトとアンデスの色彩」展示会開催にあたりましては、関係各位の多大なるご協力を賜りました。ここに記して謝意を申し上げます。

また、展示会開催に当たっては、チャレンジセンターユニークプロジェクト AR（アーカイブ・レリック）の有志メンバー、そして文学部アジア文明学科山花ゼミの有志メンバーが展示解説やディスプレイなどをお手伝いしてくださいました。学生ボランティアさんたちにも心より感謝を申し上げます。

図録『古代エジプトとアンデスの色彩』執筆にあたりましては、多忙を極める中、ご理解を賜り、出陳遺物の選定、解説文、そして「アンデス・山の神々の多彩性：「ワロチリ」文書から読みとる先住民の感性・感覚」を寄稿してくださいました文学部文明学科の大平秀一教授、そして図録レイアウトや企画にご助力をいただき、さらに「アンデス文明概説」を寄稿してくださった文学部文明学科の吉田晃章准教授に心よりの感謝をいたします。

最後になりましたが、図録体裁や版組などで困っていた際に編集用ソフトを駆使して助けてくださった、学園史資料センターの目七哲史さんに心から感謝の意を捧げます。

山花京子

協力者一覧

東海大学チャレンジセンターユニークプロジェクト有志メンバー
（学年は 2019 年度時点）

西巻 智恵美	文化社会学部アジア学科	2 年
桑原 ほのか	文化社会学部アジア学科	2 年
芹沢 達也	文化社会学部アジア学科	2 年
青木 亮一郎	文化社会学部アジア学科	2 年
上野 萌々花	文化社会学部アジア学科	2 年
菅原 綾夏	文学部歴史学科考古学専攻	2 年
鴨下 真由	文学部歴史学科考古学専攻	2 年
木村 海里	文学部ヨーロッパ文明学科	3 年
長尾 俊春	文学部ヨーロッパ文明学科	3 年
鹿内 雪美	文学部アジア文明学科	4 年

東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター
東海大学付属中央図書館 紅谷龍司・葉山きい子
学校法人東海大学学園史資料センター 目七哲史
フォトグラファー 興石有佑

執筆者紹介

大平 秀一（おおだいら しゅういち）
文学部文明学科 教授

1994 年以後、エクアドル南部高地において、継続してインカ国家の遺跡調査を継続して進めてきました。インカを考えるためには、歴史文書や現代社会の考察も欠かせません。したがってルネサンス後期の歴史文書、先住民言語で残された歴史文書の研究にも取り組み、また 2010 年以後は、ペルーにおける現代社会の様子も観察しています。主たる関心対象は、自然と人間の関係です。

吉田 晃章（よしだ てるあき）
文学部文明学科 准教授

研究対象は、中南米の先史文明です。遺跡調査や文書記録の分析を行い、先スペイン期の文明が、どのような世界観にもとづいて発展していたのかを研究しています。世界観といっても、とくに時間や空間に関わる認識や死生観が、主たるテーマです。また、文明の理論研究として、植民地時代以降のラテンアメリカ社会へ、先史文明がいかに影響を及ぼしたに関連しているのかに興味を持っています。現在はメキシコ西部地区で遺跡調査を継続して実施しています。

山花 京子（やまはな きょうこ）
文化社会学部アジア学科 准教授

古代エジプトの社会や人々の生活を解明するために、研究を進めています。
研究対象となる地域は古代エジプトが主ですが、東地中海全域に広がっており、対象年代は紀元前 3000 年頃から紀元前後まで（古代エジプト王朝の成立からクレオパトラの死まで）です。東地中海全域の物質文化の交流を主にエジプトの視点から研究しています。特に注目しているのは、現代では失われている古代の謎の物質「ファインス」というガラスと陶器の中間物質です。
歴史の謎を明らかにするために、文科系の枠にとどまらず、工学部や理学部などと積極的に共同研究を行っています。

2019 年 3 月 11 日 初版第 1 刷発行

2019 年 6 月 14 日 第 2 刷発行

古代エジプトとアンデスの色彩

Colors of Ancient Egypt and Andes

編集：山花 京子

発行：東海大学文明研究所

〒 259-1292 神奈川県平塚市北金目 4 - 1 - 1

Tel 0463-58-1211 (内線) 3059

印刷：株式会社東海教育研究所